

大学生による子ども・若者の  
復興のまちづくり調査研究事業 報告書

一般社団法人東日本大震災  
子ども・若者支援センター

東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科 リエゾンゼミⅣ (担当清水冬樹)



はじめに

本報告書は、一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センターの事業の1つである被災地における若者支援に関わる成果の一部です。

東日本大震災から10年以上が経過し、新型コロナウイルスの影響もあり、震災の風化はより一層早まっているように見受けられます。しかし、当センターの調査結果からは、被災を経験した子ども・若者への継続的な支援の必要性が明らかとなっています。見ようとしないと把握することが困難な被災した子ども・若者の震災の影響を明らかにしつつ、固有の支援や支援システムを構築することを当センターではMISSIONとし、これまで各種事業に取り組んできました。

このような中で、当センターでは今年度は東日本大震災後の子ども・若者支援に関心を持つ宮城県内の大学生に声をかけ、震災から10年が経過した宮城県内の沿岸部をフィールドとした実態調査を企画しました。具体的には子どもの人権連第22回「子どもの権利条約具体化のための実践」助成事業及び東日本大震災等大規模災害特別助成事業による助成を受けて実施いたしました。当初は広く大学生を募集する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響から、規模を縮小した形で事業を展開させざるを得ませんでした。

この事業に協力してくれたのは、センターの運営委員の1人である清水のゼミたちで、東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科の4年生22名でした。報告書のタイトルにもあるように、大学生が考える子ども・若者の復興のまちづくりの姿を示すことを目的として、22名が2つのグループに分かれ、各々の関心があるテーマを具体化し、フィールドワークを実施しました。主に石巻市をフィールドとしたグループは、東日本大震災後の子育て支援の現状と課題について調査を実施しました。南三陸町をフィールドとしたグループは、主に被災経験がある子ども・若者、そして保護者への調査を実施しました。

2021年8月には南三陸町へ足を運び、現地調査を実施する予定でした。しかし、新型コロナウイルスの第5波の影響により、中止をすることとなりました。相当な企画を学生たちが立てていただけに、大変残念な結果となりました。

それでも学生たちはオンラインによる調査等をその企画し取り組んできました。現地に行かなければわからないことがあるのは重々承知をしていますが、オンラインでも学生たちの学びたい意欲を引き出すことができることも一方で目の当たりにしたように思います。粘り強くデータから提言できることを考えている姿に、大変頼もしいものを感じることができました。この経験が、東北のこれからを作り上げることに多様な形で貢献することを願っています。東北福祉大学の22名の学生には、本事業へ積極的に取り組んでくれたことを、心から感謝申し上げます。

また、石巻市や南三陸町の皆さまには、本事業の実施に際し、多大なるご支援・ご協力を賜ることができました。本当にありがとうございました。ぜひ、ご覧いただけますと幸いです。

2022年3月

一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター代表理事  
足立 智昭

ゼミ担当教員より

2020年1月より全世界を襲った新型コロナウイルスは、私たちの暮らしを大きく一変させました。そして、大学における学びの場においても、私たちに様々な学びのスタイルの変容を求められてきました。

そもそも演習系の授業は、少人数、かつ学生同士、あるいは学生と教員の協働による研究や調査を通じた、自分なりの学びのスタイルを確立する機会を提供するものでした。しかし、新型コロナウイルスの影響により、学生同士の議論の場それ自体を避けなければなりません。ZOOM等同時双方向型の授業は実施できたものの、対面のような充実感を得ることが決して簡単ではありませんでした。東北大学の調査によると、ZOOM等オンラインによる同時双方向型の授業は、議論こそ実現できるものの、学生同士や学生と教員の協働については効果がないことが明らかとなっています。ゼミ生のみなさんは意見を交わすことができても、何か手応えのなさや、議論が終わったときに静けさを多様な形で経験してきたのではないのでしょうか。

そして、最も課題だったことは、わたし自身が2020年4月に着任したばかりであったことです。福祉大の平時の教育システムをほとんど理解できないままオンライン授業が始めざるを得ず、不慣れた授業運営にみなさんを大きく振り回してしまったことを、改めてお詫びしなければなりません。

しかし、このような状況でありましたが、今年度は対面による授業を多く実施することができました。また、今年度は昨年度と違い、フィールドこそ私が指定しましたが、それ以外のテーマや調査方法等はすべてみなさんに委ねて、ゼミを運営することができました。みなさんと一緒に南三陸町へ足を運ぶことができなかったのは残念ですが、オンラインを駆使して、ゼミ生自身の問いを明らかにするために多くの手間と時間をかけて取り組んでいく姿は、新型コロナウイルスがあったから何もできないと嘆くのではなく、こうした状況だからこそできることを見つけ出す大切さを体現していたように思います。

本当に大変な1年間でしたが、ご苦労様でした。そして、何よりも東日本大震災から10年が経過した今この時期に、震災と子ども・若者支援を切り口としたフィールドワークに関心を持ってもらえたこと、自分自身の問いを立て取り組んでくれたことゼミ生たちに、心から感謝申し上げます。

本報告書を手にとっていただいた方々にも感謝申し上げます。コロナ禍において、自身の暮らしの見通しも厳しい状況にある中、学生たちの学びに手を差し伸べていただきまして、ありがとうございます。報告書の体裁等について、一部整っていないものがありますが、これは学生の不備ではなく、指導が十分に至らなかったゼミ教員である清水の責任です。とはいえ、内容については多くの学びや気づきが散りばめられております。ぜひ、ご覧いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後となりましたが、引き続き当センターの事業や東北で学ぶ学生たちの教育研究活動にご支援賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

2022年3月

一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター  
東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科  
清水 冬樹

## 目 次

東日本大震災で被災した石巻で暮らす人々の環境の変化 —子どもを取り巻く環境と心身の発達の関係性—	1
震災の伝承 ～震災を次世代に伝える為に今あるコンテンツ課題解決に向けて～	10
南三陸町の地域活性化と若者の就労支援	16
南三陸の医療サービスと子育ての関係	26
南三陸で被災した中学生の進路	43
資料編	63

本報告書は、第22回「子どもの権利条約具体化のための実践」助成事業  
及び東日本大震災等大規模災害特別助成事業による助成を受けて実施した  
調査研究成果を掲載したものです。



# 東日本大震災で被災した石巻で暮らす人々の環境の変化

## —子どもを取り巻く環境と心身の発達の関係性—

蛭原愛絵 遠藤 楓 加藤 凌 軍司桃有  
佐藤夏鈴 高橋弘基 舘山拓正 吉田 彩

### 要約

本稿では、「東日本大震災×子育て支援×子どもの発達」を大きなテーマとして掲げ、東日本大震災後の子育て支援の現状や子どもの居場所づくり、震災と子どもの心身の発達の関係性について述べている。物的被害・人的被害ともに甚大な被害を受けた石巻市を対象とし、“石巻市子どもセンターらいつ”の館長である荒木裕美さんへインタビュー調査を行なった。

子どもを取り巻く環境の変化には、物的環境と人的環境が考えられる。震災初期は物的環境の影響が大きく、中期～後期にかけて人的環境の影響が大きいものと考えられる。物的環境と人的環境の双方に働きかけ、継続的な支援を行うことで、被災経験が与える子どもの心身の発達に寄与するのではないかと考える。

### 1. 調査の動機

子育て支援、子どもの居場所と発達について調査しようと思った理由は、東日本大震災の前後で子育て支援、子どもの居場所や環境等によりどのような変化があるのかを知りたかったからである。被災時の子どもへの支援はよくニュースで取り上げられていて目にする機会が多いが、子育て支援についてはあまりメディアに取り上げられていない印象があった。震災中は、確実に食料物資が補給されていたのかという疑問を持ち、“石巻子どもセンターらいつ”の館長である荒木裕美さんにお話を聞き、理解を深めたいと思った。

子どもの居場所支援では、子どもの居場所と発達について中日新聞の「心の傷、長期的なケアを 震災後の子どもの支援 (2020年5月4日)」という記事をネットで見つけた。記事には、震災後に落ち着きのない子どもや不登校児など、心身が不安定な子どもの報告が相次いでいるという報告があり、その背景として、震災以降の育児環境の変化により、家族と子どもが触れ合う時間が減少したことが考えられるという分析がなされていた。子どもの心身の発達と環境は密接に関係しており、子どもを取り巻く成育環境は心身の基盤を作り上げるものであると考える。そのため、「東日本大震災と子育て支援」を大きなテーマとして掲げ、震災前と震災後それぞれの子育て支援の実態と子どもの発達について調査を行う。

## 2. 調査の背景

石巻市は東日本大震災の死者・行方不明者の約2割を占めており、津波での人的被害者としては自治体で最大となっている。仮設住宅は宮城県全体の3分の1に当たる7297戸が設備された(1)。このような状況下で、避難所や仮設住宅等での生活を余儀なくされる家庭も少なくなく、慣れ親しんだ場所や人間関係から離れることになるなど、暮らしの変化が大きくあった。

近年、高齢化や核家族化、社会構造の変化や個人の価値観の多様化に伴い、住民同士のつながりや世代間交流が希薄になってきており、地域コミュニティの機能が衰退していることが問題として挙げられている。その中でも東日本大震災の影響を大きく受けた沿岸部の地域では、転居や他地域への転出により、この問題がより深刻化している。地域コミュニティの衰退は、子育てに励む保護者の「孤育て」や「育児ストレス」等に深く関係しているため、安心安全な子育て環境作りが衰退することにも直結するといえる。また、震災から1年以内に生まれた子どもを調査し、語彙と発達に同年齢の平均より約8か月の遅れが見られたという結果も出ており、震災後に生まれた子どもへの影響も報告されているといわれている(2)。さらに、特に被災地では子どもの外遊びの減少や、生活環境の変化に伴うストレスの発生等の課題が生じている(3)。子どもの心身の発達と環境は密接に関連していると考えられ、成育環境が子どもの心身の基盤を作り上げるともいえる。

そこで、地域社会全体で子育てをすることが重要であると考え。地域住民が一体となって子育てをすることで助け合いや子育てコミュニティが生まれ、保護者が抱える育児の孤立感、育児ノイローゼや児童虐待などの問題を緩和することに繋がる。また、異世代交流や子ども同士の関わりも増えることで、子どもの成長を豊かにすることにも繋がるのではないだろうか。次代を担う子どもを地域社会全体で育てることで、保護者の育児不安や孤独感の軽減、子どもを取り巻くあらゆる社会問題の早期発見・対応、さらには地域の活性化を図ることができると考えられる。

### 【引用文献】

(1)宮城県ホームページ (2021.11.8 閲覧)

『宮城県における応急仮設住宅の建設に関する報告～東日本大震災への対応状況～』  
p.24

<https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/126168.pdf>

(2)中日新聞 Web (2021.4.19 閲覧)

『心の傷、長期的なケアを 災害後の子どもの支援』

<https://www.chunichi.co.jp/article/39258>

(3)内閣府 (2021.11.8 閲覧)

『東日本大震災被災地における子育て支援』 p.2



### 3. 問題意識

フィールドワークを通して、①食事、②居場所、③子ども・子育て世帯への支援、④子どもの心身の発達の主に4点について調査を行う。

1点目の食事に関しては、震災時の食事状況や支援物資の提供状況についてである。ライフラインが復旧するまでに時間がかかったことで、貯蓄している食料が不足したことや栄養が偏った食料が支給されたことなどが考えられる。特に妊娠中や授乳中の妊産婦にとっては、母子それぞれの健やかな成長のために、妊娠前よりも多くの栄養素の接種が必要(1)となる。しかし、緊急時であるためにバランスの整った食事をすることや、乳幼児に必要な粉ミルクや離乳食などの確保が難しいことが考えられる。そのため、被災地域の当時の現状について聞き取りを行なう。

2点目の居場所に関しては、震災発生当時の子どもの暮らしの場・遊び場がどこにあったのかについてである。地震・津波の被害によって生活環境の変化が余儀なくされたことが考えられる。各学校の体育館や公民館などに設けられた避難所での生活や、仮設住宅に移行してからの遊び場の変移など、震災前後の生活の変化について聞き取りを行う。

3点目の子ども・子育て世帯への支援に関しては、子どもの遊び場・居場所の提供と保護者への子育て支援についてである。仮設住宅の設営によって公園や学校などの遊び場が減少し、転居による環境の変化が考えられる。また、環境の変化によって子育てコミュニティにも影響があり、保護者の子育てに関する不安や悩みが増えたことも考えられる。そのため、当時子育てをしながらNPO法人を立ち上げた荒木裕美さんからお話を伺うことで、当事者の思いを知りたい。また、当時提供されていた行政的な支援やボランティアの現状、被災地・者支援に携わった人材等についても合わせて聞き取りを行なう。

4点目の子どもの心身の発達に関しては、震災前後の子どもの心情の変化やその影響による人との関わりの変化などについてである。東日本大震災を経験した人々は心理的・身体的に様々な影響を受けた(2)。大切な家族や友人を亡くした人もいれば、住み慣れた家や地域を離れざるを得なくなった人もいたり、家族や子どもたちを取り巻く生活環境は突然に変化した。震災を通して恐怖体験や辛く苦しい思いをした子どもたちは、心の傷を癒すために周囲に攻撃的に接したり、反対に自分の殻に閉じこもったりするなどの行動を起こすのではないかと考えた。そこで、当時子育てをしていた荒木さんが感じる子どもの発達や心身の変化、子育て仲間から聞いた話など、インタビューの中で聞き取りを行なう。これらの調査を通して、災害時に必要な支援や問題点について考察を行い、今後起こり得る災害時の支援方法や自分たちにできる対応についてまとめたい。

## 【引用文献】

(1)国立健康・栄養研究所（2021.11.15 閲覧）

『妊産婦のための食事バランスガイド』

<https://www.nibiohn.go.jp/eiken/ninsanpu/balanceguide.html>

(2)『東日本大震災後の子どもの発達についてー幼児期から学齢期に着目してー』田中久美子, 2017

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jraps/38/1/38\\_38/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jraps/38/1/38_38/_pdf/-char/ja)

## 4. 調査方法

本研究で用いるデータは、“石巻子どもセンターらいつ”の館長である荒木裕美様へのインタビューから得られたものである。インタビューは、2021年7月28日に“石巻子どもセンターらいつ”にて2時間程度行わせていただいた。調査方法は荒木様から頂いた資料をはじめ、メモからである。調査実施者は加藤凌、軍司桃有、舘山拓正、佐藤夏鈴、吉田彩の5名である。半構造化インタビューの形式をとり、以下の質問項目をもとに調査を進めた。

### 子育て支援

- 1 遊び場をどう作るのか
- 2 食糧物資の栄養の不安
- 3 一時保育の場所確保
- 4 遊び場はどうやって作るのか
- 5 遊び場のスタッフの育成
- 6 緊急時どうやってスタッフを派遣するか

### 居場所支援

- 1 震災と発達の遅れと影響
- 2 幼児前期の発達課題である自律性を育む環境は家庭（もしくは地域）に存在しているのか
- 3 震災当時、子どもたちの居場所としてどんな場所があげられていたか
- 4 らいつについて（利用児童、事業内容）

### 調査対象者

荒木裕美 様

NPO 法人ベビースマイル石巻 代表理事

石巻子どもセンターらいつ 館長

## 5. 調査結果

### (1) 食事

食事面・栄養面の課題として、震災当時の現状としてカップラーメンや菓子類といった栄養価が非常に低い食料のみであったり、その食料が十分とはいえない量が支給されていたという話を聞くことができた。このことから、栄養面の課題と食料支給についての課題が挙げられた。当然のことながら、避難所には乳幼児から高齢者、そして妊婦など幅広い年齢層の地域住民がいる。その中で私たちは当時妊婦で避難所に避難していた方に話を伺った。その方の話では、妊婦は自分自身の栄養と共に胎児の栄養面のことも考えなくてはいけない状況だったという。しかし大変な思いをしているのは自分だけではないことは確かであり、乳幼児や高齢者についても配慮しなければならないことも理解はしていた。妊婦を優先して欲しい気持ちがありながら、それを言いづらい状況ということも辛かったと言っていた。さらに、日常生活で当たり前にあった食べ物がなかったり、好きな物を好きなだけ食べられなかったりなどのギャップに苦しんでいたということもあったそうだ。現在、便利な保存食品は10年前に比べて数も量も豊富になってきているが栄養面の偏りは変化しないだろうという結果になった。10年前の大震災を経て、保存食品の栄養価の向上や増量などについての改善点が挙げられるのではないかと考える。

### (2) 子どもの居場所

子どもの居場所については、震災直後の避難所や仮設住宅についてお話を伺った。当時の避難所は乳幼児、高齢者、障がい者などの分類化されていなかった事から居心地が悪かったという話が挙げられた。そして、10年たった今居場所のニーズに気づいたこと、分類化が進んだことから居場所が増えつつあるが、まだまだ数が足りないことが今後の課題になると伺った。仮設住宅は部屋が狭く、壁も薄いことから声も響いてしまうため、子どもを静かにさせなければいけないということが親の負担にもなり虐待へと発展してしまうケースもあった。さらに、親のイライラが子どもにも伝わってしまいストレスを受けることもあった。自宅避難をしていた家庭では物資等がなく、子どもへの影響がないか、自らの体調管理を怠れないことの心配があったという。

### (3) 子ども・子育て世帯への支援

子ども・子育て世帯への支援に関しては、子どもの遊び場についてお話を伺った。震災後日が経っても、遊び場の場所の確保等はしばらく手付かずであり、整備してから遊び場として利用できるまで半年程度かかった。前述の避難所や仮設住宅でのストレスを感じながらの生活も踏まえると、震災以前に比べて、子どもたちが我慢を強いられる状況が多くあり、あたりまえの育ちができていないのではないかとということが震災直後の

結果としてあげられる。

#### (4) 新たな課題

インタビューを行う中で新たに出てきた課題として、災害に関する情報が不足していることが挙げられた。震災当時はインターネットも現在ほど普及していない上に停電も発生していたため、避難者全員がどのような状態であるのか把握する術や情報を集めるなどの術がなかった。そのため、避難所に張り紙をすることやビラを配るなどして情報を集めていた。荒木さんご自身も、当時乳幼児の子育てをしていたことから、避難所内で孤立している環境から日常の空間を確保しようと親同士が話せるイベントを計画し、子どもと絵を書くアートセラピーを行い自身のお子さんとコミュニケーションを取りながら周りの人と話せる環境を作った。そして、その場所が様々な情報共有の場所になると考え、多くの人に参加してもらえるように上記のように避難所に張り紙等を行なったと伺った。

## 6. 調査結果の考察

### (1) インタビューで得られた結果からの考察

インタビューを行う前にグループで考えていた食料・栄養面の問題については、震災当時実際に起こっていたことがインタビューを通して確認することができた。震災当時に比べて 現在では保存食の種類が増え、栄養価の高いものもある。しかし、その遠くない災害がたった今起こってしまったとき、栄養不足や食事不足、栄養の偏りは必ず出てくると考えた。この課題が出てくるとなれば妊婦さんや乳幼児といった方々への課題や不安も現時点でも残るのではないかと考えている。

災害時となれば被災した方々が我慢をせざるを得ない環境に強制的に置かれる。その中で支援の声を上げることを臆しない環境を作れるかどうかということが今後の課題になってくると考えている。

次に避難所において震災が起きた当初様々な年代の方々が一か所に集まったことで居心地が悪かったという課題について、解決するには年代を分けることが一つの案として出てきたが、子どもと親が区分されてしまう可能性が出てくるため最善策ではないと考えた。そのため、年代は混ざってしまうが、一世帯ごとに分けることが家族としても安心して過ごせると考えた。仮設住宅での騒音と捉えられてしまう子どもの声については、地域全体で理解してもらうことが解決策として挙げられた。子どもへの理解や地域全体での子育ての大切さを深めるために、仮設住宅周辺で子どもが遊ぶことができたり、大人がお互いに話すことができたりする場を設けることで、理解を深めることに繋げて問題の解決ができるのではないかと考えた。

災害時の情報不足に関しては、今日でも使われている防災無線の利用掲示板を利用

しつつ、10年前よりインターネット機能が普及・向上したことで当時以上に情報を集めやすくなっていると考えている。しかし、実際に災害が起きてみないと分からない、不明な点が多く不透明であると考えた。

## (2) 文献調査 ー子どもの心身の発達ー

東日本大震災は物理的な被害に留まらず、被災者に対しても震災後に強い心理的影響を及ぼした。例として、うつ病障害や心的外傷後ストレス障害 (PTSD)、急性ストレス障害や適応障害などが挙げられる。加えて、被災して3年後に小学校に入学した子どもが「友だち関係・言葉・教科学習における困難・落ち着きのなさ・テンションの落差」などの発達上の問題が示唆されたことも挙げられる。その要因として、まず被災後3～8か月にみられた発達の後退や不安がその後の数年間にわたっても発達に何らかの影響を及ぼしたと推測される。被災後に親や周囲の大人に気遣い、気持ちや欲求を我慢してきたり、物語や童話などの文化にあまりふれないまま育ってきたのではないかということが考えられる。さらに、発達障害児・者に関しては、ストレスに対する抵抗力が弱く、自然災害のような危機的状況に曝された際に心理的影響を受けやすく、定型発達児や他の障害児・者と比較して、特有の反応を示すことが明らかとなっている。変化や症状の悪化を示す神経発達障害児・者を抱える養育者は、常に子どもを見守っている必要があり、配給や買い物などに行けず物資不足に直面していた。そのため、被災後の子どもの変化や付随する苦勞体験は、養育者のストレスとなり、子どもに対する認知や感情に影響を与えていたと考えられる。

障害の有無にかかわらず、東日本大震災という衝撃的な出来事によって、何らかの心理的影響を受けた子どもが存在することが認められている。また、その原因は、地震や津波を体験・目撃したことに加え、震災後の周囲の大人的心情や環境の変化を敏感に感じ取るといった子どもならではの要因があると考えられる。大人にとっても予測できない未知の出来事であるため、子どもに対してはより迅速で十分なケアが必要であると考えられる。

災害後の子どもへのケアとして、安心して話すことができる大人との関係・環境づくりや、信頼できる大人との絵本や物語などの文化を媒介としての情緒的な関わりが重要であると考えられる。震災後は生活環境が大きく変化し、避難所や仮設住宅での生活で親子ともに衰退が溜まっていることが想定されるため、支援物資などによる物的な支援だけでなく、絵本の読み聞かせなど、心の支援も重要だと考える。そうした子どもから大人へ話すきっかけの支援も震災後の子どもの発達を支えることにつながるのではないかと考える。

さらに、震災後のトラウマからの回復には、子どもの所属するコミュニティ (家庭・学校・地域等) 全体が共に歩み、復興の過程を共有していくことが大切であると考えられる。子どもが自分自身を表現しても大丈夫、安全だと感じられる環境を提供することが大前提にある。そのためには、地域との関わりや協力が不可欠である。災害時の役割分担や避難

完了までの手順、避難場所での配慮事項や備蓄品の確認など、地域全体で備えておけることは沢山ある。緊急時に地域住民で協力するためには日頃からの関わりが重要であるため、様々な交流の場やコミュニティの構築によって、住民同士が繋がり、地域が支えあっていけるのだと考える。また、災害時に限らずだが、障害のある方はもちろん、高齢者や妊婦などにとっても必要なバリアフリー化を進めることも必要であると考えた。地域住民と行政との繋がり大切さも考えなければならない。

## 7. まとめ

本研究は荒木裕美さんへのインタビュー調査をもとに進めた。インタビューでは、震災当時の食料物資の実際、乳幼児を持つ家庭や妊産婦ならではの苦悩、避難所や仮設住宅で過ごすうえでの問題点、親の不穏や負担による子どもへの影響などについて、子どもを持ちながら震災を経験した立場からお話を伺うことができた。東日本大震災を経験したとはいえ、グループメンバー内でも災害の捉え方には偏りがあったため、当事者から伺ったお話は貴重なものとなった。

震災後の子どもを取り巻く環境の変化として大きいのは、暮らしの場という物的環境と周囲の大人の心身の余裕や不安感といった人的環境の2つが考えられる。震災直後は物的環境の変化が与える影響が大きく、家族で暮らす場所や学校、遊びの場の変化により、子ども自身ではどうにもできない苦しさが与えられていた。そして、震災後日が経つにつれ、人的環境の変化が与える影響が大きくなり、親や学校の先生など周囲の大人が持つ不安感やイライラを敏感に察知することで、知らぬ間にストレスとして溜まってしまい、発達にも影響が与えられてしまったのだと考える。

災害時の子ども・子育て世帯への支援のためには、物的環境と人的環境の双方に働きかける必要があると考える。物的環境としては、子どもが体を大きく動かしたり、思うように声を出したりしても問題のないような場所や子ども同士で交流できる場の確保が求められる。人的環境としては、信頼できる大人の存在や自分の気持ちを正直に話しても大丈夫だと安心できる環境をつくることが求められる。また、大人の心情が子どもにも影響するという観点から、保護者に対する心身のケアも重要であると考えた。そのためには、親同士で気持ちを共有できるコミュニティや親子で集える場を構築し、不安を解消するきっかけ作りをサポートすることが必要である。

社会的に弱い子どもに対して、直接的な支援を行うことはもちろん必要だが、子どもを取り巻く環境に目を向けて、外側から支援を固めることも大切だと考える。自分から声を上げにくい立場である子どもは何かと後回しにされがちだが、将来の社会の担い手として不可欠な存在であることを忘れず、継続的で慎重な支援を行うべきである。

## 参考文献

- ・宮城県公式ホームページ（2021.11.8 閲覧）  
『東日本大震災の被害状況』  
<https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/219952.pdf>
- ・『子どもの発達に焦点をあてた地域の役割ー子どもの認識するソーシャルキャピタルの測定からー』岡正寛子・田口豊都（2021.11.8 閲覧）  
<https://core.ac.uk/download/pdf/51478363.pdf>
- ・長崎県（2021.11.8 閲覧）  
『地域コミュニティとは』  
<https://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kurashi-kankyo/sumai/community/imi/>
- ・総務省（2021.11.8 閲覧）  
『地域コミュニティの現状と問題（未定稿）』p.7～  
[https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/kenkyu/community/pdf/070207\\_1\\_sa.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/community/pdf/070207_1_sa.pdf)
- ・『子どものトラウマ関連障害の治療ー東日本大震災後中長期のいわてこどもケアセンターにおける実践からー』八木淳子，2017  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscap/58/5/58\\_700/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jscap/58/5/58_700/_pdf)
- ・『障害児者やお年寄りの居場所のある町内会づくり』新田理恵，2018  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsmid/43/1/43\\_27/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsmid/43/1/43_27/_pdf/-char/ja)
- ・『東日本大震災で被災した神経発達障害児・者と養育者および地域の人々との関連性についての探索的検討』川嶋賢治，2017  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssw/57/4/57\\_121/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssw/57/4/57_121/_pdf/-char/ja)
- ・『東日本大震災後の子どもの発達についてー幼児期から学童期に着目してー』田口久美子，2017  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jraps/38/1/38\\_38/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jraps/38/1/38_38/_pdf/-char/ja)
- ・『東日本大震災被災生徒における自閉症スペクトラム傾向と外傷後ストレス反応および抑うつに関連の検討』瀧井綾子・久保佑貴・渡邊明寿香・八木咲亜耶・大谷哲弘・小関俊祐・伊藤大輔，2019  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/stresskagakukenkyu/advpub/0/advpub\\_2019005/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/stresskagakukenkyu/advpub/0/advpub_2019005/_pdf)

# 震災の伝承

～震災を次世代に伝える為に今あるコンテンツ課題解決に向けて～

菊地生 湯川柊 久戸望 稲村南風

## 要約

壊滅的な被害をもたらした東日本大震災により、南三陸町では震災復興において、新たな地域組織の形成など協働関係が震災後に大きく変化していった。また、震災から10年が経過し、震災を知らない子ども達が誕生している。この子ども達を中心に震災の経験をどのように伝えることができるか疑問を持つようになった。これらの背景から、今あるコンテンツに対して、課題解決や子どもたち目線での伝承活動のゴールやサイクルを明確化していくことを動機とし、南三陸観光協会の講話や小野寺さんへのインタビューを行った。その結果、同じ講話や語り部活動をしている方々の中での目的意識に違いがあることがわかり、コンテンツ自体の課題だけではなく何を誰に伝えたいのかという人へのアプローチにも着目した。また自分のことのように感じてほしいという共通点もあるため、違いと共通点双方の考えから興味関心をパーセンテージ化し、それに合うSNSやネットを駆使した柔らかいコンテンツと既存コンテンツを連携していくことが、伝えることに繋がると考える。

## 1. 調査の動機

津波を経験していないにせよ、東日本大震災を経験したひとりとして、実際にその現場や事実を知らない子ども達に伝えていくためにどのようなコンテンツがあるのか。また、今現在あるそのコンテンツに対して、どのような課題があり、子ども達が目線で伝えていくためには、どのような段階を経て東日本大震災により、起こった被害や事実を伝えていくことがより良いのか。これらを内陸に住んでいた私達の考えも含めて、コンテンツの課題解決や子どもたち目線での伝承活動のゴールやサイクルを明確化していくこと。さらに、これらを踏まえた上で、後世に伝えていくための伝承活動を引き継いでいく若者世代の人材を増やしていき、伝え続けていくためのサイクルを作るにはどのような方法があるのかを、実際に伝承活動をしている方々の話を聞いた上で解決していきたいと思ったためである。

震災から10年が経ち、震災の風化が進んでいる中で震災を知らない世代もいるため、そのような方々にどう伝えるかも大きな要因である。



## 2. 調査の背景

南三陸町は、震災時壊滅的な被害をもたらし、浸水深は最大 20 メートルを超えた。海岸沿いの低地にある市街地や集落、農地などはほぼ浸水し、多くの家屋や漁船が流され、町役場も流された。被害家屋は全世帯の約 6 割以上に上り、一時は人口の半数以上が避難所への避難を余儀なくされた。震災復興において南三陸町では既成地域の変容、機能の拡大、新たな地域組織の形成など協働関係が震災後によって大きく変化していった。※1

震災後の活動として挙げられるのは、語り部による学びのプログラム、街歩き語り部、防災キャンプ備え（南三陸町観光協会）、震災を風化させないための語り部（南三陸ホテル観洋）などがある。しかし、震災から時間が経ち、2012 年に受け入れていた語り部参加者約 20000 人と比べ、現在はおよそ 3 分の 1 にまで減少している。※2 このように時間の経過とともに震災への関心が薄れているという現状が見受けられる。また、震災から 10 年が経過し、震災を知らない子どもたちが誕生している。この子どもたちを中心に震災の経験をどのように伝えること 6 ができるか疑問を持つようになった。

コンテンツの課題解決や子どもたち目線での伝承活動のゴールやサイクルを明確化していくことを目標とした中で紙媒体のほかにもインターネットで情報を検索することが容易になっており、多くはそこで情報を知ることが多い。しかし、対象を不特定にしているため、特定の人（今回であれば、若者、子どもたち）に向けてのダイレクトな情報は少ないように感じる。

## 3. 問題意識

「震災の記憶を若者と子ども目線で次世代に伝える」ために今あるコンテンツの課題をどう解決し、新たなものを作っていくかについて調査する上で、震災を経験していない若者や子どもに表面的な事実しか伝えられていないのではないかという問題にたどり着いた。各地域において「～だより」のような情報誌の出版や、語り部活動は行われているが、若者や子どもの目には届いていないのではということや、伝えていく為の人が人口減少によって減っているのではないか。このことから、南三陸における持続的な震災被害伝承のサイクルを構築する必要があり、そのうえで、現在あるコンテンツに対してさらなる改善を加えることが必要になるのではないかという点を問題意識としている。

## 4. 調査方法

本来であればグループメンバー 4 名全員で南三陸などの現地に赴き、インタビュー調査

や実際に目で見て調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴い、現地に行くことを断念せざるを得なかったため以下ようになった。2021年10月18日（月）にゼミの時間を活用し、Zoomで南三陸観光協会が開催している「震災語り部講話・オンライン～私が体験した東日本大震災～」の講話を50分、その後質疑応答10分程度行った。質問しきれなかった項目については、後日メールにて回答を得た。

2021年11月7日（日）には南三陸町から語り部をされている小野寺翔さんにお越しいただき、1時間程度インタビュー調査を行った。調査は菊地、湯川、久戸、稲村の4名で行った。小野寺さんが語り部活動を行うようになった理由をはじめ、あらかじめメールで添付していた質問項目に沿ったインタビューを展開し、回答内容に合わせた調査を進めていった。内容については録音を行い、報告書作成の際に活用した。

## 5. 調査結果

南三陸観光協会からは以下のような調査結果が得られた。震災の記憶を若者と子ども目線で次世代に伝える為に、自らが中高生で体験した震災の経験を語り、同じ目線で捉えやすいように工夫を行っている。特に現地型では中高生を聞き手が多い傾向にあり、震災の記憶がない子どもたちに、震災学習や震災を風化させないことを目的として開催している。また、オンラインでは公民館や労働組合等の団体も多く、震災から10年経た現在、地域の防災の見直しを目的に受講しているとの声も多くある。このことから、震災の経験から得られた知識をもとに、記憶の風化・防災意識の向上をメインとしていることが明らかになった。

次に今あるコンテンツの課題としては、コロナ禍によりオンラインが主流になったことで、現地に来る機会が減ったことである。オンラインに関しては、東日本大震災の体験談や、現在にいたるまでの復興の道のりを語るプログラムや、震災当時に避難所のリーダー（運営）を経験した町民による避難所生活の様子や経験を語るプログラムの2つを開催しているが、実際に震災の記憶がない子どもたちに体験談を話すだけでは、自分事に置き換えて受講できるかという共通の課題が浮上した。さらに、より自分事として感じられるように子どもたちと少しでも当時の年代が近い若い語り部の活躍が必要になってくるため、人材の確保も課題となっている。

小野寺さんからは以下のような調査結果が得られた。震災の記憶を若者と子ども目線で次世代に伝える為に、震災の記憶をメインに語り、何を誰に伝えたいのかを明確にした語り部活動を行っている。興味の持ちどころは人によって違うため、興味がない人に伝えるために既存のコンテンツとの連携をしている。例えば、スマホゲーム「ポケモンGO」とのタイアップ企画として語り部バスを開催し、少しでも関心を引き付ける工夫を行っている。

今あるコンテンツの課題としては、コロナ禍であるためオンラインを通し、遠くの人に伝えられるという利点がある一方で、直接会って顔を見て雰囲気を感じて話すことが難しいことである。さらに、10年たって南三陸町は表面上綺麗な建物が多くなっているため、

現地に行っても当時のイメージを想像することは難しくなっている。分からないものをイメージすることは容易ではないため、柔らかい表現でいかに分かりやすく伝えられるかが必要である。どう解決し、新たなものをつくっていくかについてはVRを利用し、より現実に近い体験を提供すること、若者に合わせたコンテンツとは何か考えた際に、Twitterで絵の物語が拡散されているように柔らかい表現で震災に際しての物語を考えてみるなど工夫を行うことである。このことから、小野寺さんは語り部活動を通して、震災の記憶を風化させないために、どんな支援をしてもらったのか、どんな方に支えてもらったのかを常に意識し、自身が関わっている林業等（南三陸町の自然）を体験してもらうことで、多くの人に震災の過去と現在、そして未来を伝える活動をメインに行っていることが明らかになった。

## 6. 調査結果の考察

今回の調査を受けて、南三陸町観光協会が重点に置いている伝え方と小野寺さんが重点に置いている伝え方にはそれぞれ違いがあるのではないかと考える。

まず、南三陸町観光協会についてだが、震災時に南三陸町ではどのような被害があったのか、そして当時中学生であった担当者の実体験をもとに1時間程語っていただいた。南三陸町の被害の状況→震災発生から翌日～三日間程の学校での体験話→防災関連、震災からしばらく経った後の南三陸町の様子といった流れで写真を使いながら効果的に語っていただいたことで想像を膨らませながら聞くことができた。語り部の後にメールを送った際に、「どの世代の聞き手が多いのか？今あるコンテンツにどのような課題があると考えているか？」等と質問した所、中高生が多く、地域防災の見直しを目的に受講する方が増えていること、課題として、コロナで外出機会が減り、特に震災の記憶がない子どもたちに体験談を話しても自分のことのように置き換えて話を聞けるかという点が課題としてあり、子どもたちと年齢が近い語り部の人材が必要と仰っていた。このことから南三陸町観光協会が意識していることとして、子供たちを中心にし、体験談を通して自分事のように考えてもらう情報発信型の語り部をしていると考える。しかし、疑問として南三陸町観光協会が今後目指すゴールとは何か？ということが浮上した。

次に、小野寺さんについてだが、実際に大学に来ていただき、1時間程私たちが用意した質問+αで思ったことや新たな質問に答えていただいた。南三陸町観光協会とはスタイルが異なる討論型での形で思ったことをその場で質問することが出来たのはとても大きかった。小野寺さんが行ってきた語り部の参加者は割合的には中学生が多く、やはり震災の記憶が無い子どもたちがどのような震災被害があったのか、また防災関連の向上を目的に聞きに来る方が多いのではないかと考える。現在、オンラインを中心に行っているが、対面のように表情の判別やその場に依じての対応がしづらいとの事だった。小野寺さんが苦労している中で「わからないものをわかるようにする大変さ」を挙げていた。南三陸町観光協会と似ているが、震災の記憶がない子どもたちがどうやって自分事として捉えるの

か？と考えたときに、自分を振り返り、今までどんな人に支えられてきたかを思い返しながら語っているということを知り、小野寺さんが手がけている実際の林業体験を通して話を一方的に聞くのではなく、南三陸町の自然を全身で感じてもらう形は大きく異なっている点である。ここに小野寺さんがゴール(目標)としているものがあるのではないかと考える。

## 7. まとめ

まとめとして、「震災の記憶を若者と子ども目線で次世代に伝える」に辺り、今あるコンテンツの課題をどう解決し、新たなものを作っていくかについて調査する上で、震災を経験していない若者や子どもに表面的な事実しか伝えられていないのではないかとという問題に対して、興味・関心の度合を0%~20%、20%~40%、40%~60%、60%~80%、80%~100%と5段階の段階別にアプローチのかけ方を変化させ、表情の変化やトーンの上げ下げ等また、「これは多くの人に見せるやり方がいいのか？個人的に見せる方がいいのか？」これによって全く掲載方法が変わっていることが分かった。調査の背景でも挙げたように南三陸町では様々な震災の風化をさせない活動が行われており、防災意識の向上や家族との防災時の連絡見直しのきっかけなどいつ震災が来ても大丈夫なような心掛けを伝えている。

調査結果から、震災を経験していない子どもたちに対してどのように自分のことのように思ってもらえるかということを知り南三陸町観光協会も小野寺さんも意識をされており、言葉だけの説明ではなく写真や動画、または実際に現地で体験活動をするなど「情報発信型」と、語っている中で疑問に思ったことをすぐに聞くことを目的にする「討論型」の2種類に分けることができる。

コンテンツの課題として、コロナ禍であるためオンラインを通し、遠くの人に伝えられるという利点がある一方で、直接会って顔を見て雰囲気を感じて話すことが難しくなっていること、10年たつて南三陸町は表面上綺麗な建物が多くなっているため、現地に行っても当時のイメージを想像することは難しくなっていることが挙げられた。

どう解決していくか？と考えた際に、VRの活用、多くの人に目が行くようにやわらかい表現、Twitter等での絵の物語での投稿、既存コンテンツとの連携が挙げられる。実際にVRではNHKがVRやドローンカメラを使って震災の記憶を語っている。※3 また、Googleが提供しているサービスの中で「未来へのキオク」というサービスがあり、※4 ここでは時間軸を戻したり、進めたりして震災前と後の様子を知ることができる。勿論南三陸町だけでなく様々な場所での様子を見ることが可能である。

最初は、伝えるコンテンツが少ないと想定していても調査を進めていくうちに私たちが知らないところでサービスが展開されていた。これを震災を知らない人にどのように伝えていくか？さらに吟味する必要がある。

## 参考文献

- ・※1 コミュニティ・レジリエンスとソーシャル・キャピタルー南三陸における震災復興の取り組みから [https://u-shizuoka-ken.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=2302&file\\_id=40&file\\_no=1&nc\\_session=5ifh513j99cn6p6r2uaals35u7](https://u-shizuoka-ken.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2302&file_id=40&file_no=1&nc_session=5ifh513j99cn6p6r2uaals35u7) 今井良広、金川幸司、後房雄共著 2015年 2021年11月8日閲覧
- ・※2 宮城県における震災学習プログラムに関する現状分析ー東日本大震災と津波災害から6年間の震災伝承の特徴ー [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jisss/31/0/31\\_77/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jisss/31/0/31_77/_pdf) 浅利満理子、中川政治、佐藤翔輔共著 2017年 2021年11月8日閲覧
- ・※3 NHK 震災の記憶 <https://www.nhk.or.jp/vr/shinsaivr/index.html> 2021年11月30日閲覧
- ・※4 未来へのキオク <https://www.miraikioku.com/> 2021年11月29日閲覧

## 南三陸町の地域活性化と若者の就労支援

18FS192 佐々木 汰知

18FS043 伊藤 聖耀

18FS074 大澤 涼花

### 1. 要約

東日本大震災により膨大な被害を受けた南三陸町は 11 年経った現在、人口減少と高齢化が問題視されていた。そこで私たちは、南三陸を盛り上げていくには若者が必要であると仮定し、漁業の後継者不足、若者不足、地域の衰退を解決していく方法を考え始めた。

まずインターネットで南三陸町について調べると、ブルーツーリズムを通して世界初の FSC 認証と ASC 認証を取得した自治体として町を PR していたり、定住促進住宅や就労奨励金を用意しているなどのメリットを見つけたりした。

これらの情報を踏まえて、南三陸町で漁師をしている金毘羅丸さん、移住・定住支援センターの職員の方にインタビューを行ったところ、インターネットには乗ってない PR 活動や現場から見た課題などを聞くことができた。私たちが考えていた「若い世代の人を集める」ことは、現場でも検討中の課題としてあげられていたが、それは現時点ではそこまで大きい課題でない為、特別力を入れた取り組みをしていないが、将来的に様々な分野同士で協力していきたいと話していた。

### 2. 調査の動機

南三陸町は昭和 35 年のチリ地震津波をはじめとした過去の各種災害の経験から、毎年防災訓練を実施するなど災害に強いまちづくりを進めてきたが、東日本大震災では多くの尊い人命、財産を一瞬にして失い、甚大な被害を受けた。南三陸町について他のグループでは若者の心のケアや医療といった若者本来に視点を当て調査するのに対し、私たちは南三陸町が復興していく中でも後継者不足や若者不足、地域の衰退が問題視されている南三陸の地域活性化といった若者の活躍できる場所や取り組みについて焦点を当てた。私たち若者が活躍できる場や環境について調べるべく、主に第一次産業の中でもトップ（約 70%、全体でも約 15%）の就労人口を誇り、南三陸町の特徴である漁業を中心としたフィールドワークを通し、ヒアリングを行うための計画を立てた。

具体的に南三陸町の漁業では有名な金毘羅丸さんから震災前後による漁業や交流の変化や地域の業種に対する考え方の変化についてお話を聞き、まとめる。また、定住促進住宅や就労奨励金からみる若者が南三陸に貢献できる受け入れ態勢やきっかけ作りとしてどのように働きかけているか役場の方の協力を得てリアルなお話を聞きまとめた。

### 産業別・男女別15歳以上人口

(単位:人)

産業分類	平成7年			平成12年		
	計	男	女	計	男	女
総数	10,318	6,117	4,201	9,691	5,680	4,011
第1次産業	2,967	2,046	921	2,471	1,677	794
農業	942	498	444	659	353	306
林業・狩猟業	54	51	3	30	28	2
漁業・水産養殖業	1,971	1,497	474	1,782	1,296	486
第2次産業	3,455	2,028	1,427	3,211	1,937	1,274
鉱業	12	12	0	7	7	0
建設業	1,578	1,459	119	1,424	1,313	111
製造業	1,865	557	1,308	1,780	617	1,163
第3次産業	3,890	2,039	1,851	4,007	2,065	1,942
電気・ガス・水道・熱供給	17	15	2	15	14	1
運輸・通信業	395	351	44	405	363	42
卸売業・小売業	1,551	718	833	1,481	676	805
金融・保険業	77	36	41	65	32	33
不動産業	11	4	7	5	3	2
サービス業	1,539	692	847	1,748	746	1,002
公務	300	223	77	288	231	57
分類不能	6	4	2	2	1	1

各年10月1日

平成17年			平成22年			平成27年		
計	男	女	計	男	女	計	男	女
8,855	5,184	3,671	8,257	4,778	3,479	6,244	3,678	2,566
2,303	1,557	746	1,932	1,365	567	1,317	924	393
604	351	253	445	261	184	327	182	145
17	15	2	53	51	2	46	40	6
1,682	1,191	491	1,434	1,053	381	944	702	242
2,611	1,619	992	2,312	1,443	869	1,954	1,320	634
2	2	0	0	0	0	2	1	1
1,160	1,063	97	968	877	91	1,076	941	135
1,449	554	895	1,344	566	778	876	378	498
3,937	2,004	1,933	3,999	1,961	2,038	2,720	1,286	1,434
14	13	1	12	12	0	10	8	2
379	334	45	408	355	53	298	264	34
1,180	549	631	1,127	536	591	602	290	312
57	21	36	58	22	36	46	16	30
9	5	4	21	16	5	17	11	6
2,037	869	1,168	2,106	813	1,293	1,540	562	978
261	213	48	267	207	60	207	135	72
4	4	0	14	9	5	253	148	105

資料:国勢調査

### 3. 調査の背景

私たちは、南三陸町の地域活性化や地域復興ということについて知りたいと考えていた。震災から10年が経過し、震災に対しての風化や高齢化が進み、若者が都市部へ流出してしまうことによる後継者不足が進行している中で私たちは特に漁業についてどのようにすれば若者に興味を持って

もらえるのかということについて南三陸町へのフィールドワークを通して現地調査をする予定で調べ学習をしていた。しかし、コロナウイルスの感染拡大に伴ってオンラインでのやり取りをするために南三陸町の現状について調べていくうちに、課題先進地である南三陸町をフィールドにした研修が行われていることを知った。これまで世代間交流を図るための研修制度や空き家を改修してシェアハウスにしたりするなど、移住希望者のニーズに対応する施設をつくっていることも分かった。また、ブルーツーリズムを通して世界初のFSC認証およびASC認証の両認証を取得した自治体として南三陸町の魅力を発信したりしていることを知った。他にも、若者の流出を防ぐ方法の一つとしての「定住促進住宅」であったり、その他の地域の若者が南三陸町に住むことができるようにするための「就労奨励金」など東日本大震災以降、経営体制の見直しを行っていたりすることもわかり、課題解決先進地として私たちは南三陸町が復興していく中で後継者不足や若者不足、地域の衰退が問題視されている南三陸町の地域活性化について焦点を当て調査を進めていくことにした。

#### 4. 問題意識

インターネットを通して調べていくと様々な交流の場や若者に対する就職支援制度、南三陸の情報発信に力を入れていることがわかった。そこで私たちはさらに深掘りをしていくために実際の現場で働く方からインタビューを行い、様々な取り組みを理解した上で私たち若者の目線としてリアルな現状を把握することで課題の解決に繋がると考えた。

主に漁業で地域の活性化を図るフィッシャーマンジャパンさんと南三陸町で活躍する金比羅丸さんから南三陸町の震災前後の仕事や交流の変化、若者はどのような活躍の場があるのかについて調査を行った。また若者の活躍を期待している研修と就労奨励金や定住促進住宅の利用率とその他の数字から実際のニーズが掴めると思った。

#### 5. 調査方法

「定住促進住宅」「就労奨励金」について調査すべく南三陸町の役場へ問い合わせたところ、民間の「南三陸移住定住支援センター」が管轄ということで、そちらの國枝さんからお話をお伺いした。

フィッシャーマンジャパンや南三陸の海のブランド化に取り組む高橋さんからは、ブルーツーリズムを通して若者が漁業に関わる仕組みについてなどお伺いした。

インタビュー方法については、どちらもオンラインにて、1時間程度をかけて行われた。調査実施者は佐々木、伊藤、大澤の3名で実施した。以下は質問項目である。

---

#### 【南三陸移住定住支援センター】

- Q 1、定住促進住宅の利用者の年代と利用している数
- Q 2、就労奨励金についてと利用者の年代
- Q 3、移住者へのサポートはどんなことをしているのか
- Q 4、南三陸のHPに乗った移住者向けアンケートの結果

---

#### 【高橋直哉様(1回目)】



- Q1、世代間交流について
- Q2、次世代継承につながるPR活動はどんなことをしているのか
- Q3、世代・年代ごとの利用割合
- Q4、南三陸町事態に興味を持ってくれる人はどのような人か
- Q5、コロナウイルスの影響とそれ以前のお客様の数にギャップが生じているのか
- Q6、実際に興味を持っていてくれるのはどのような人か
- Q7、ボランティア活動をしている方はいるのか
- Q8、周りの漁業される方との関わりはどんな感じなのか
- Q9、次世代づくりのために意識していること
- Q10、この仕事に対してのやりがいや印象に残っているエピソードはなにか
- Q11、利用される方はどこから来るのか（県外・県内）
- Q12、これから（今後）の展望

-----

【高橋直哉様(2回目)】

《みやぎ漁業就労支援オンラインフェア関連の質問》

- Q1、カキ養殖での募集はしていないのでしょうか。  
(AFC/SFC 認証制度がある中で)
- Q2、カキ養殖・刺網漁・カツオの一本釣り等たくさんある中で、どの業種が1番希望者が多かったですか。
- Q3、参加者が思う漁業者になる上でのギャップなどありますか（よくある声など）
- Q4、就職した人の暮らしについて教えてください。  
(実家・一人暮らし、元々住んでいたのか・遠方からか)
- Q5、どのような方が参加者に多いですか。  
(ex. 学生・転職等での社会人が多いのか、家を近くに持つ人なのか等)、主催側の理想として、若者をどのくらい必要としていますか。

Q 6、震災から10年が経過し、今後研修制度等を行っていくうえで、工夫したり、募集年代を絞る等の取り組みを行う予定はありますか。  
(今後の展望について)

《震災と漁業に携わる若者についての質問》

Q 7、震災発生によっての南三陸町民の構成に変化があったと思いますが、それに伴う若者の漁業への就労状況の変化等あれば教えてください。

Q 8、震災前後の若者の就労状況について（南三陸から出ていく人・入ってくる人・役場との連携等）高橋さん自身が感じたことはありましたか。

Q 9、震災前後で（金毘羅丸や知り合いの南三陸の漁師の方々）新人の募集状況の変化があれば教えてください。

Q 10、震災当時の仕事（震災により変化した仕事内容等）をどのように復活させようとし、今に至ったのかについて教えてください。

Q 11、震災以降、南三陸における若者の減少やそれに伴う若い人たちの働き場がなくなる可能性がある中で、若者の減少をどのように思いますか。

## 6. 調査結果

### 【國枝様】

9/28

#### A 1、・定住促進住宅の数

↳震災の仮設住宅の数で合計5部屋（歌津地区）4使用1空

- ・役場が民間に業務委託して行っている。
- ・利用者はIターン者が多く、年齢層も若い
- ・センターとしては家庭を持って定住してほしいから若い方に勧めている。  
また、定住が目的である為ある程度の収入がないと入れない。

#### A 2、・元々住んでおりそのまま就職する人が利用

・Uターン者の利用が多い。

↳県外で就職し、一通り働いて田舎に帰りたい人向け

- ・利用した人：令和元年スタートして新規学卒者  
(全部で10人制度を利用。I→2、U→1 7名は町内の卒業生)
- ・復興公共住宅：家賃を払うことが厳しい人向け（15万8千円以下）

#### A 3、・民間企業は町内のハローワークで相談した人に対して仕事にしていく。

- ・情報提供・ツアー、移住者同士の交流会などの気軽に話せる人を増やす取り組みをしている

- ・また、移住者はボランティアしていた人やコロナウイルスの影響で戻りたい人が多い。
- ・コロナウイルス前は東京など県外でのイベントを通しての交流(移住イベント)や自分の街をPRする場があり、そこで交流を増やし、興味を持ってもらっている。

A4、利用者がまだ少なくアンケートも任意であるため、集まっていない

-----

**【高橋直哉様】**

9/28 (火) 10:30~ 約1時間

- A1、震災前：他の地域（浜）同士の交流はなかった。よそはライバル  
震災後：協力して発信するように（震災きっかけでのつながり）  
浜（地区）ごとに分けて考えなくなり、一つのもの「南三陸町」として発信  
関西より西の方になると「宮城県」として発信  
→「フィッシャーマンジャパン」石巻市中心：全国へ輸出入等枠を広めていく
- A2、ホームページやSNSを使ってPR活動
- A3、小中高生の課外授業として（修学旅行でも）  
農業体験の漁業 ver  
釣り→家族連れ 漁業→小中学生
- A4、参加した学校は来年も参加する  
高校・大学はネット等で調べて海産物を購入している人も  
釣り船の入り口として（初心者向け）南三陸町の良さを体験してもらう  
会社が飲食店の材料として使用するために来る。飲食店とのつながり
- A5、関東圏は自粛ムード、県内はキャンセルが相次ぐ  
一方で県外を予定していたが県内の南三陸町に来る人も  
客観的に見て足の数は増加傾向にある（去年は自粛していたが一昨年より増加傾向）  
コロナウイルスで新規の客層も増えた。  
これまでは釣れた魚はリリースしていた。  
時間も融通を利くようにしたり、その場で試食をしたりした。乗船人数は縮小
- A6、高校や大学・飲食店
- A7、県外からのボランティア活動が多い
- A8、元々漁業者同士共同での作業（浜ごとに年代はバラバラでわかめの養殖を）  
→組合ごと（歌津地区・志津川地区等）に情報交換をしている。  
浜を超えて青年部（若手の団体）があり、ホヤの種をとる作業を  
なぜホヤ？漁港に面した海しか使えず、制限があるためそこで取れるもの
- A9、幅広い年代を漁師として受け入れている。未経験からでも大丈夫  
（ロープワークや乗船体験等のプログラム）
- A10、震災前：量→生産量を上げることに必死。出荷は漁港で渡してそれで終わり  
震災後：質→お金になるものは何かと考えたときに体験活動をする

年中：漁業体験、5-7月：釣り、秋-4月：養殖（牡蠣・ホタテ・ワカメ）  
体験を通して海や船の素晴らしさを伝え、知ってもらう。  
消費者の声を聴くようになった。心にゆとりを持てるようになった。

A11、コロナ前：関東圏 コロナ渦：仙台からが大半  
地元の小学校が体験として訪れることも  
6割県内、4割県外（ボランティア活動として元々来ておりそこからのつながりで）

A12、発信していくことの大切さ  
発信し続けながら幅広い年代に伝える。  
海が変化している現状→新しい何かを（今までにない漁業を展開）  
Ex) 水温高い為、南側の漁業や陸上での養殖を進める  
海が変わっても漁業ができるようにする

---

【高橋直哉様(2回目)】

※事前のヒアリング内容

、2020年度・開催回数：1回（11月15日）

★有効な申し込み者数：32

・当日参加者数：23人

★年齢層：申し込み者の年齢層

20代：19名

30代：2名

40代：6名

50代：4名

70代：1名

- ・その後の漁業研修につながったのが4名
- ・年齢層は全員20代
- ・漁業就業につながったのが1名
- その他、宮城県内での漁業以外の就業につながったのが1名
- 漁業アルバイトへの参加につながったのが1名

県内でフィッシャーマンジャパン経由で就業に繋がったのは50名程度

---

Q 1、牡蠣養殖の認証はASC認証ですね。

ASC認証を取得している海域の牡蠣漁師で求人を出している人はいます。

Q 2、牡蠣養殖の希望が多かったです。

Q 4、実家暮らしか1人暮らしかはそれぞれですが、地域内で新規就業者を見つけることができな  
いという課題が前提にあるため、地縁のない人が多いです。

Q 5、学生や転職を考えている社会人が多いです。若者はすごく必要としています。

Q 6、就業率と同時に、定着率も上げていきたい。そのためには、受け入れ側（漁業者）の補強も必要。

Q7、漁業者の意識は細かくヒアリングをしていないのでわかりませんが、数字だけでみると、震災後に20代～30代の漁業従事者数が増えています。

Q8、興味を持っている人が多いと感じているが、南三陸において現在漁業権を取得して就労は難しいと感じる。南三陸では担い手不足をそこまで感じない。他地域のように担い手不足に悩むのはもう少し先だと思う。  
過密な漁場から脱却する(ASC認証等)動きが町の協力で行われているので、現在の状況で漁業者を増やすのは矛盾してしまうと思う。一時的な働き手が欲しいと思う。

Q9、近場の浜の話ではありますが、震災後は手が空く年配の漁業者が多くなった為、新人募集はあまり見かけない。金比羅丸でも若手の募集をしたことがあるが、住居の問題等あったのと震災で養殖漁業をやめた叔父が働きにきたので現在募集はしていない。

Q10、震災後は、浜で協力して再開した。(漁具や船を貸したり、合同で作業等)  
現在も合同で作業をするようになった。

Q11、南三陸の今現在、深刻な問題にはなっていないと思うが今後は必ず高齢化が進み漁業者は少なくなるので、受け入れ体制は行政と一緒に整えていく必要があると思う。漁業の問題は、漁業権がある以上漁師だけで解決できる問題ではない。  
質より量の時代が終わり、量より質の時代が来た今、漁業だけを見て漁業だけに専念する即戦力よりも、世の中に通用する付加価値を漁業の中に見出し発信する能力の方が大事だと思うので、敢えて漁業の道へは遠回りして欲しいと思う。

## 7. 調査結果の考察（800字以上）

南三陸町の現状として人口減少と（高齢化）が課題とされており、そのための解決策・改善策として私たちは南三陸町を盛り上げるためには若者を増やすことが大事なのではないのかと考えた。そのために若者の流出を防ぐことやその他の地域の若者が就職先として南三陸町を選び、住み続けるための環境が大事なのではないかと思いこの調査を始めることにした。住み続けるためには「仕事場」と「住む場所」が必要であり、「住む場所」に関しては、流出を防ぐ方法の一つとして「定住促進住宅」、その他の地域の若者が南三陸町に住むことができるようにするために「就労奨励金」などの制度があり条件はそれぞれあるが利用できることが分かった。しかし利用人数を調査してみると、「定住促進住宅」は年代別で20代3名、30代3名、40代1名となっており、「就労奨励金」は5名が利用していたことから、数として少数ということが分かり、若者に対しての住まいを提供することの難しさや取り組みを民間へ委託していることで提供の範囲に限界があると感じ、数を増やすためには空き家を利用して賃貸住宅を増やし、大きな規模で展開していく必要があると考えた。

また「仕事場」として、私たちは漁業について目を向けた。調査前は、「南三陸を盛り上げるためには若者が必要」のスタンスで考えていたが、実際に話を聞いているうちに、地域を盛り上げられるのは若者だけとは限らないのだと感じた。

震災前は、南三陸町の漁師は仲間というよりも敵対しており、質よりも量といったスタンスで仕事をしていた。ただ、東日本大震災以降浜同士の交流が増え、地元でずっと活躍されてきた漁師さ

んたちの結束が強まり、南三陸町の海を大事にしようという動きに変わったことで、結果として海の質が上がり南三陸町は世界初のFSC認証およびASC認証の両認証を取得した自治体として魅力を発信することに成功した。もしかしたら、現在活躍している漁師たちのコミュニティが若者からすると介入しにくい雰囲気を感じるのではと感じていた。

しかし実際は漁業を全国規模で若者に紹介等の取り組みをしているフィッシャーマンジャパンが若者と漁師とのコミュニティ形成のきっかけづくりを展開している。

南三陸町以外にも他の地域の漁業についての紹介をしているため、他の漁業と南三陸町の違いも区別した説明もしており、南三陸町の特徴や魅力を発信している。

この魅力をSNS等で発信していることからより多くの人たちが南三陸町に興味を持ってもらえるようにするために工夫をしていたことが分かった。そのため、SNSを普段から使用している若者中心に南三陸町の魅力が伝わり、最終的には南三陸町に就職や定住につながると考えていた。なおのこと若者を南三陸町に受け入れる上記に挙げたような体制を強化していく必要があると考える。

## 8. まとめ

震災以降の南三陸は、若者の流出や地域の衰退が問題視されているため、南三陸に住む若者を増やし、さらに若者が活躍できる場を見出すことが南三陸のさらなる賑わいにつながると考え、調査を始めた。

現場の声として、南三陸町の漁業では有名な金毘羅丸さんから震災前後による漁業や交流の変化や地域の業種に対する考え方の変化についてのインタビューをしたところ、現実問題、南三陸で定住するにあたって就職を考えた時に、漁業権を取得することは難しく、また震災によって手が空く年配の漁業者の方々が今現場で働いているため、若者の募集は多くはなく、結果的に現状としては南三陸の担い手不足はそこまで深刻化していないことなどがわかった。

また、定住促進住宅や就労奨励金からみる若者が南三陸に貢献できる受け入れ態勢やきっかけ作りとしてどのような働きかけをしているかを役場の方の協力を得てインタビューをすることができた。南三陸へ移住を決めた人の多くは、震災復興のためのボランティアで南三陸を訪れ、それをきっかけに町の魅力を知ったため、この先震災の風化や震災復興のボランティア活動の減少に伴い、ボランティア活動以外のきっかけで南三陸の魅力を知ってもらう方法を考えていたり、移住関連のイベントにも積極的に参加していたりすることがわかった。

今回のインタビュー調査を通して、すべてに共通していたことは、私たちが考えていた通り「若い世代の人を集めたい」ということだった。これは私たちも想定していた回答だった。しかし、分野によっては、それは今すぐの話しではない場合があるということは意外であった。

事前にインターネット等で南三陸の現状や課題についてたくさん調べてはいたが、今回の調査をしなければ分からなかった生の声をたくさん聴くことができた。

これらの調査を経て、今はこのままでも問題は無いのかもしれないが、将来的に、漁業に携わっている上の世代の引退や、更なる町の人口減少、若者の町外への流出などを迎えた時に、若者の担い手不足は南三陸の課題となりうるため、それぞれ異なる分野どうしが、南三陸全体として情報共有や協力していくことが必要なのではないかと私たちは考える。

## 9. 参考文献

### ●東日本大震災による被害の状況について

↳<https://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/17,181,21,html>(参照 2021-10-11)

### ●第2回みやぎ漁業就職オンラインフェア

↳<http://triton.fishermanjapan.com/fair2021/>(参照 2021-10-28)

### ●南三陸町移住・定移住支援センター

↳<https://www.minamisanriku-iju.jp/>(参照 2021-10-28)

●フィッシャーマンジャパン公式サイト

↳<https://fishermanjapan.com/>(参照 2021-10-29)

●南三陸町統計書（令和2年度版）

↳<https://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/10,793,c,html/793/20210414-150022.pdf>（参照 2021-12-20）

# 南三陸の医療サービスと子育ての関係

津田ひな子・小畑瑛輝・小田嶋阜

私たちは、震災で被害を受けた南三陸を対象として調査を行った。また、南三陸町子育て支援センターに協力を経てアンケート調査を行った。南三陸の若者人口（15歳から29歳）の減少に着目するとともに小児医療等についても着目している。調査を進めていく中で若者減少と医療が関連していると考察した。南三陸の若者人口は、平成31年度の調査では、2010年2058人、2040年は458人とされている。震災後30年で若者の著しい人口減少が見られる。その要因として、震災後の病院の在り方、子どもに対する医療が関わっているのではないかとという考察を立てた。住まいの近くに、小児科や産婦人科がない、その地域に医師が常に従事しているわけではないなど安心して子育てができないのではないだろうか。様々な人口減少の要因があるが、私たちは子育てに対する医療というものに目を向けていこうと考えた。

## 1 調査の動機

震災から10年が経過し、南三陸での病院数や医療サービスが充実しているのかに興味を持った。南三陸にある医療や病院を調べていく中で、南三陸の若者が減少しているという問題を多く目にするようになった。若者減少の理由は何にあるのだろうか。南三陸の若者の人口減少と、医療機関の減少や数の少なさ、医療サービスの空虚が関連しているのではないかと考察した。

10年経った現在、南三陸は様々な復興に対する取り組みを行っている。南三陸に住み続けている人、子どもをもつ保護者は、どのような思いや考えを持ち子どもの子育てを行っているのか、南三陸の医療サービスについてどのように考えているのかを知ってみたいと考えた。それを踏まえて、私たちは医療と子育ての関係性、重要性を見出すとともに課題を見つけ考えていく。

## 2 調査の背景

私たちのグループでは、南三陸町の医療について考えた。医療について考え調べていく上で、小児科や産婦人科が少ないことを知り、出産や子育てにも影響しているのではないだろうかと考えた。また、そのことが南三陸の若者の減少にも繋がっているのではないかと考えた。さらに、小児医療体制の整備、子どもの病気への初期対応について調べを行ったところ、的確な判断や医療処置が重要であることから小児医療体制についての問題に着目した。

1つ目は、南三陸町内での医療サービスは現状極めて少なく、町外へと通院しなければ行けないのではないかとということ。

2つ目は、小児医療サービスだけでなく、産科などのサービスも失われつつあり、その中で南三陸町の住民らは先の見えない不安感に襲われているのではないかと言うことだ。1つ目に関して、これは東日本大震災の影響もあり2011年以降南三陸町の医療サービスは年々減少傾向にある。

これらのことから、まず南三陸町内の医療サービス環境に着目した。そこで見つけたのが「南三陸町子育て支援センター」だった。この施設は、小さい子どもをもつ様々な年代のお母さん達が数多く利用しており、現状の南三陸町の小児医療サービスを調査するのに最適だった。東日本大震災発生後、南三陸は復興に対する様々な取り組みを行なっている。その反面実際に住む人々とのギャップに私達は着目し、子ども子育て支援計画を参考にし、調査を進めた。

## 3. 問題意識

現在、震災での影響を受けた南三陸の地域では、若者（15歳から29歳）の人口が減少している。また、それには南三陸の医療体制が関わっているのではないかと考えた。南三陸について調べていく中で、私たちはまず南三陸の産婦人科や小児科の少なさに着目した。病院が少ないということから、子育て等に対する不安が高まっていき南三陸での住みづらさに繋がってしまっているのではないだろうかと推測した。

この調査では震災を通しての変化、子育てをしていく中での南三陸の良さ、医療と子育ての関係性・重要性また、震災への記憶の風化を考える中でこれから先10年、20年先の自らの子ども



に対して震災についてどのように考え、どのように伝承していくのかを明らかにしていく。

#### 4 調査方法

本研究で用いるデータは、南三陸町子育て支援センターの保護者へのアンケート調査から得られたものである。アンケート調査は、2021年11月5日から11月29日まで全12問の質問を含んだアンケートであった。サンプリング方法は事前学習からである。アンケート作成者は津田ひな子、小畑瑛輝、小田嶋皐の3名で行った。

調査方法は、前期学習のweb調査を引用した。

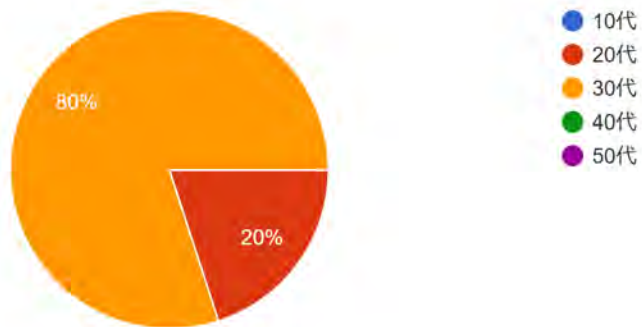
アンケートの概要は、主に対象者がどのような理由で南三陸という場所に住んでいるのか、また、子どもに着目し子育てをしていく上での良さ等も調査した。医療という面にも着目し、かかりつけ医や医療サービスについての質問も含め調査した。質問項目は以下のとおりである。チェック式を用い適宜自由記述を設けた。

- 
1. 調査対象者の年齢
  2. 調査対象者の職業
  3. 調査対象者の子どもの年齢
  4. 調査対象者の同居家族
  5. 調査対象者が南三陸出身（年齢に関わらず20年以上南三陸に住んでいるか）であるか
  6. 現在も南三陸に住み続けている理由に当てはまるものを選択
  7. どのような理由で今、南三陸に住んでいるか当てはまるものを選択
  8. 将来、自身の子どもに南三陸に住み続けてほしいと思うか
  9. 8番の理由
  10. 南三陸の子育ての良さはなにか
  11. 子どものかかりつけ医がいるかどうか
  12. かかりつけ医がいる病院までどのくらい時間がかかるか
  13. 南三陸で安心して出産、子育てできる医療サービスが備わっているか
  14. 13番目の理由
  15. 震災前後で、子どもに対する医療で変化を感じたことはあるか

## 5. 調査結果 (5名の調査より)

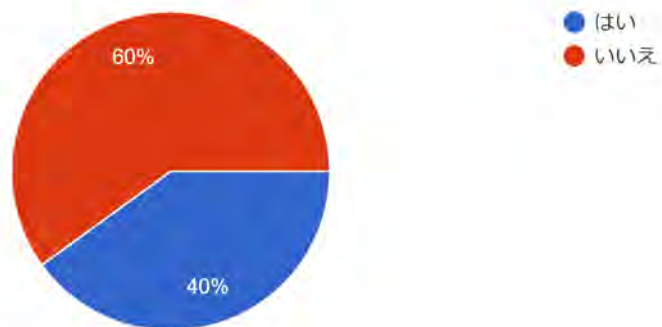
ご自身の年齢をお答えください

5件の回答



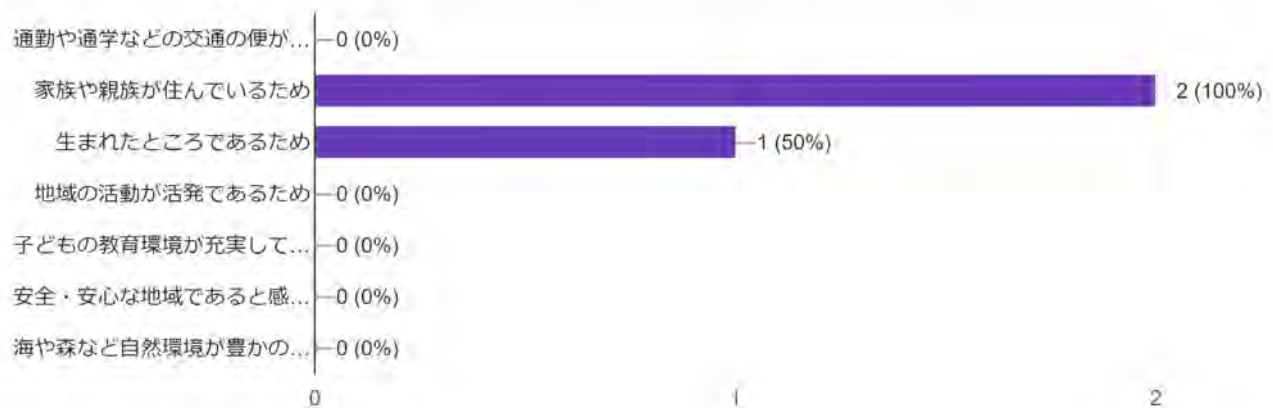
Q1. あなたは南三陸出身（年齢に関わらず20年以上南三陸に住んでいる）ですか

5件の回答



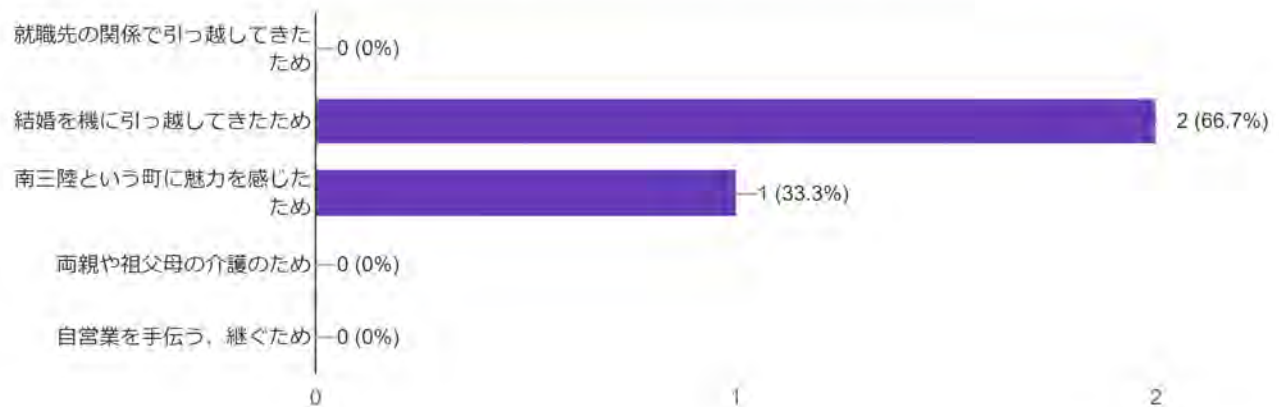
現在も南三陸に住み続けている理由に当てはまるもの全てにお答えください

2件の回答



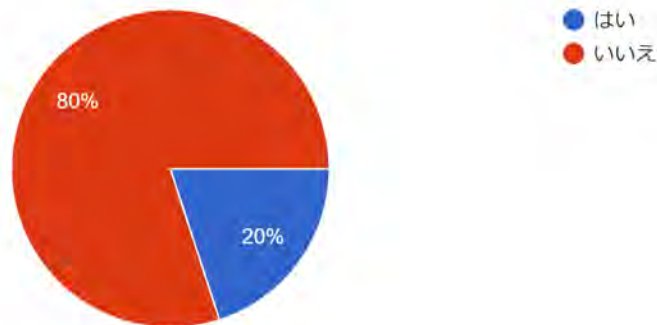
どのような理由で今、南三陸に住んでいるか当てはまるもの全てにお答えください。

3件の回答



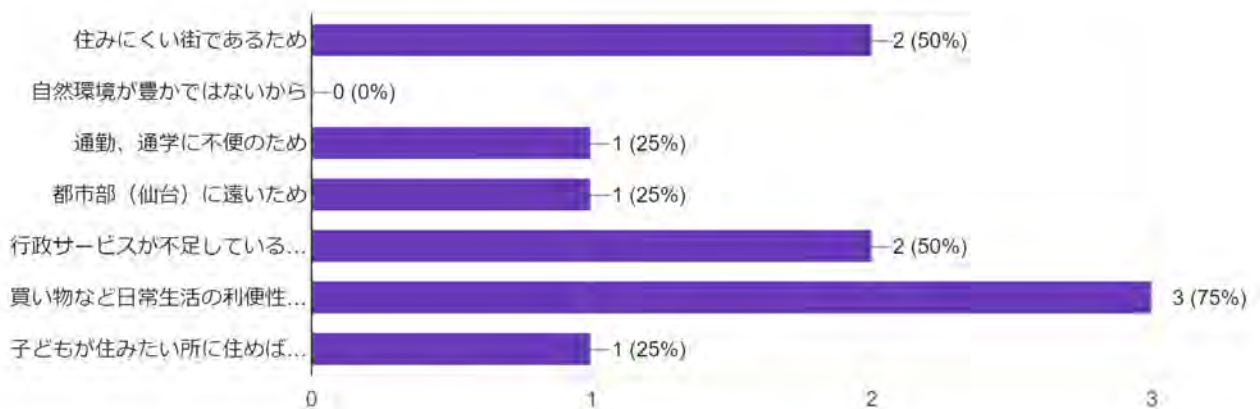
Q2. 将来、お子さんに南三陸に住み続けて欲しいと思いますか。

5件の回答



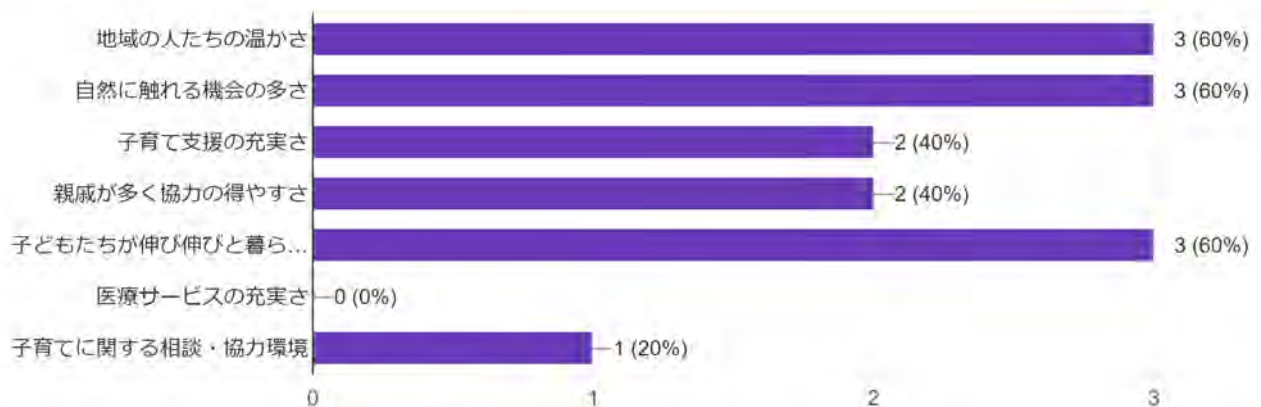
なぜそうお考えですか（複数回答可）

4件の回答

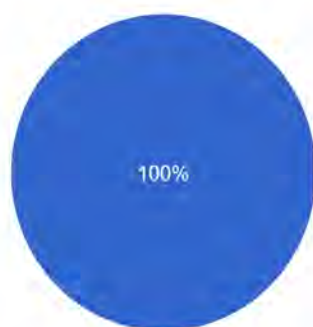


Q5. 南三陸町での子育ての良さについて、当てはまるもの全てにお答えください

5件の回答

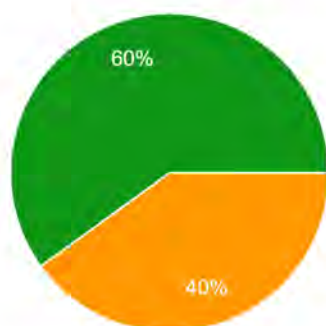


Q6.お子さんのかかりつけ医は南三陸町内ですか  
5件の回答



- はい
- いいえ

Q8.南三陸で安心して出産、子育てできる医療サービスが備わっていると感じますか。  
5件の回答



- そう感じる
- 少し感じる
- あまり感じない
- 感じない

町内に出産する場所がない。南三陸病院の婦人科や小児科がいつも受診できる環境でない。

南三陸病院の小児科が隔日だから。せめて午前だけでもいいので毎日やって欲しい。

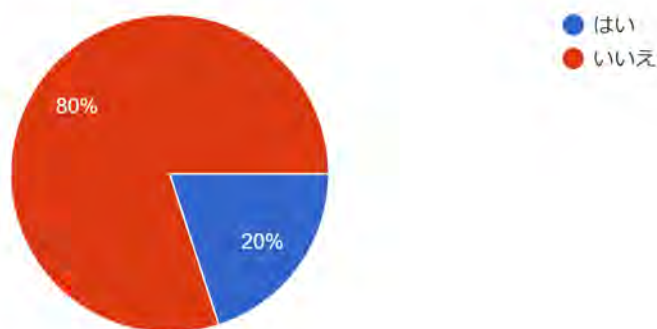
小児科が週3しかない

町に産科がない。婦人科も週一回のため、ほとんどの人が町外に通院する。小児科も週3回の午前診療のみで十分とは言えない。

出産できる場所がない。

Q10.震災前後で、子どもに対する医療で変化を感じたことはありますか。

5件の回答



## 6. 調査結果の考察

アンケート調査では、南三陸町に住み家庭をもつ20代1人、30代4人の5名から回答をいただいた。そのうちの2名は、南三陸出身であり、3名が南三陸出身ではなかった。南三陸出身の捉え方としては、20年以上南三陸に住んでいるかということである。南三陸出身である回答者、南三陸に出身ではない回答者、それぞれに質問を行った。南三陸に住み続けている理由を調査した結果、南三陸出身であると答えた2名は、「家族や親戚が住んでいるため」「産まれたところだから」と回答した。前者には、2名中2名が回答しており共通の回答であった。一方、南三陸出身ではない回答者に、なぜ南三陸に住むことになったかと質問したところ、「結婚を機に引っ越してきた」に2票、「南三陸という町に魅力を感じた」に1票という回答があった。それぞれ南三陸出身、南三陸以外の出身と異なる2者ではあるが、南三陸には頼れる場所、頼れる人がいるという思いがあらわれているように感じる。

南三陸の子育ての良さについて調査した。(複数回答可) その結果、「地域の人たちの

温かさ」に3票、「自然に触れる機会の多さ」に3票、「子育て支援の充実さ」に2票、「親戚が多く協力の得やすさ」に2票、「子どもたちが伸び伸びと暮らせる環境が整っている」に3票、「子育てに関する相談、協力環境」に1票、医療サービスの充実さ」には0票であった。子育てに対する環境等に多くの良さを感じているようである。注目すべきところは、医療サービスの充実が0票であるということだろう。南三陸で子育てすることに多くの良さを感じているのであれば、医療サービスについて改善していくことが必要になってくるであろう。

自らの子どもに南三陸に住んでほしいかという質問に対して、いいえという回答が多かった。理由は、共通して利便性ということに対する回答であった。例えば、「近くにコンビニやスーパー等の商業施設が少ない」「通学が不便である」等の票が多かった。やはり生活に利便性というものは必要不可欠なのかもしれない。

私たちが着目している点である医療について様々な質問を行った。子どものかかりつけ医は南三陸であるかという質問に5人全員がはいと回答した。しかし、南三陸で安心して出産、子育てできる施設・サービスが備わっていると感じるかという質問に「感じない」が3票、「あまり感じない」が2票であった。この回答に対して、なぜそう思うのかを記述式で回答を求めた。「町内で出産できる場所がない。南三陸病院の婦人科や小児科がいつも受診できる場所でない。」「南三陸病院の小児科が隔日だから。せめて午前だけでもいいので毎日やってほしい。」「小児科は、週3日しかない」「町に産科がない。婦人科も週1回のため、ほとんどの人が町外に通院する。小児科も週3回の午前診療のみで十分とは言えない。」「出産できる場所がない」があげられた。

震災前後で、子どもに対する医療で変化を感じたことは、4人が「変化を感じない」と回答している。医療に対するマイナスな思いを持っている保護者が多かったが、震災前後で医療サービスが変化しているというよりは、震災前から医療サービスに対するマイナスな思いがあったのではないだろうか。震災や復興という面に目を向け過ぎてしまい、既存のサービスや施設に目を向けられていなかったのかもしれない。先ほども述べたように、南三陸には子育てに対する良さが多くある。そのため、医療サービスをより充実させることで子育てに特化したよりよい町となるのではないだろうか。

## 7. まとめ

南三陸に住み続けている理由や住んでいる理由はどちらも共通しており、特に『家族や親戚が住んでいる、結婚を理由』が多数の票を占めていた。この結果より大半の人が子育てや生活をする上で、他者からの手助けや頼れる環境を求めていることが判明した。その点に関して、南三陸町内で親族に頼れる環境があることが強みと言える。その一方で、医療サービスの充実に対する良さをを感じる人は、アンケート結果を踏まえても0%であった。子育てに対する様々な良さを持つことがアンケート結果からも読み取ることができる。医療サービスを改善することができるのなら、南三陸町内での子育てがより充実するのではないか。医療サービスについて、アンケートに答えた方全員のお子さんのかかりつけ医は南三陸であった。しかし、上記でも述べたように医療サービスに対する改善は

必要であることが調査から分かった。子育てをする上で、小さな子どもが体調を崩すことは多くあり、予測できないものである。その都度、子どもをもつ親は不安の感情をもつことになる。南三陸の病院は小児科・婦人科が常に受診できる状況ではない。東日本大震災以前から医療サービスに変化はあまりなく、医療サービスが充実していなかった。小児科は週に3日の午前であり、婦人科は週に1回である。ほとんどの人が町外に通院している。また、産科が町内にはなく、出産できる場がない。多くの子どもを持つ親が、医療サービスに不安な感情を持ち、医療体制の改善を強く思っている。しかし震災以前から医療サービスは改善されていないことが調査からわかり、これらのことが南三陸町における人口減少を防ぐことができない一つの要因になっている。

#### 参考文献

南三陸子育て支援センター

<https://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/7,4854,33,165,html>

南三陸町子ども・子育て支援事業計画

<https://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/8,13251,45,204,html>



# 南三陸町の小児医療や子育て環境についての調査

私達東北福祉大学の清水ゼミでは、被災地での人口と医療の関わり方について研究しております。本研究の目的は、南三陸の小児医療と子育ての関わり方を知ること、人口減少と子育て施設減少の現状を明らかにし、南三陸での医療と子育ての関わり方について課題を明確したいと考えております。調査データは研究スタッフのもとに厳重に保管され、統計的に処理されます。個人のプライバシーの保護については十分配慮し、あなたにご迷惑をおかけすることはありません。ご協力いただきました調査データに基づき報告書を作成し、東北福祉大学に提出することを予定しております。研究目的以外には使用いたしません。上記の趣旨を理解いただき、率直にありのままのお考えをご回答ください。なお、調査への協力は任意であり、協力しなかったことでああなたが不利益を被ることはありません。アンケート調査への回答および用紙の提出によって、本研究への協力について同意したこととみなさせていただきます。

ご自身の年齢をお答えください



ラジオボタン

- 10代 ×
- 20代 ×
- 30代 ×
- 40代 ×
- 50代 ×
- 選択肢を追加 または 「その他」を追加



必須



ご職業についてお答えください \*

- 主婦
- 会社員
- 公務員
- 自営業

パート・アルバイト

その他...

---

お子様の年齢についてお答えください（第一子）※数字でお答えください\*

記述式テキスト（短文回答）  
.....

---

お子様の年齢についてお答えください（第二子がいらっしゃる場合）※数字でお答えください

記述式テキスト（短文回答）  
.....

---

お子様の年齢についてお答えください（第三子がいらっしゃる場合）※数字でお答えください

記述式テキスト（短文回答）  
.....

---

...

お子様の年齢についてお答えください（第四子がいらっしゃる場合）※数字でお答えください

記述式テキスト（短文回答）  
.....

---

同居しているご家族について、あてはまるもの全てにチェックをいれてください\*

配偶者

祖父母

親戚

その他...

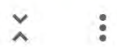
Q1. あなたは南三陸出身（年齢に関わらず20年以上南三陸に住んでいる）ですか\*

- はい
- いいえ

セクション 1 以降 次のセクションに進む

9 セクション中 2 個目のセクション

Q1に「はい」と答えた方に質問です。



説明（省略可）

現在も南三陸に住み続けている理由に当てはまるもの全てにお答えください

- 通勤や通学などの交通の便が良いため
- 家族や親族が住んでいるため
- 生まれたところであるため
- 地域の活動が活発であるため
- 子どもの教育環境が充実しているため
- 安全・安心な地域であると感じているため
- 海や森など自然環境が豊かのため
- その他...

## Q1に「いいえ」と答えた方に質問です。



説明（省略可）

どのような理由で今、南三陸に住んでいるか当てはまるもの全てにお答えください。

- 就職先の関係で引っ越してきたため
- 結婚を機に引っ越してきたため
- 南三陸という町に魅力を感じたため
- 両親や祖父母の介護のため
- 自営業を手伝う、継ぐため
- その他...

セクション 3 以降 次のセクションに進む



9 セクション中 4 個目のセクション

## セクションタイトル（省略可）



説明（省略可）

Q2. 将来、お子さんに南三陸に住み続けて欲しいと思いますか。 \*

- はい
- いいえ

### Q3. (Q2) で「はい」と答えた方に質問 × ⋮ です。

説明 (省略可)

なぜそうお考えですか (複数回答可)

- 住みやすい街であるため
- 自然環境が豊かなため
- 南三陸の行事が盛んであるため
- 土地柄、人柄が良いため
- 行政サービスが充実しているため
- 自らも住んでおり、良さを感じているため
- その他...

セクション 5 以降 次のセクションに進む ▼

9 セクション中 6 個目のセクション

### Q4. (Q2) で「いいえ」と答えた方に質問 × ⋮ です。

説明 (省略可)

なぜそうお考えですか (複数回答可)

- 住みにくい街であるため
- 自然環境が豊かではないから

- 通勤、通学に不便のため
- 都市部（仙台）に遠いため
- 行政サービスが不足しているため
- 買い物など日常生活の利便性が悪いため
- その他...

セクション 6 以降 次のセクションに進む

9 セクション中 7 個目のセクション

## セクションタイトル（省略可）



説明（省略可）

Q5. 南三陸町での子育ての良さについて、当てはまるもの全てにお答えください \*

- 地域の人たちの温かさ
- 自然に触れる機会の多さ
- 子育て支援の充実さ
- 親戚が多く協力の得やすさ
- 子どもたちが伸び伸びと暮らせる環境
- 医療サービスの充実さ
- 子育てに関する相談・協力環境
- その他...

Q6. お子さんのかかりつけ医は南三陸町内ですか \*

Q6.お子さんのかかりつけ医は南三陸町内ですか \*

- はい
- いいえ

Q7.かかりつけ医がいる病院まで時間はどのくらいかかりますか \*

- 10分未満
- 10～20分
- 20～30分
- 30～40分
- 40～50分
- 1時間以上

セクション 7 以降 次のセクションに進む

9 セクション中 8 個目のセクション

## 無題のセクション



説明 (省略可)

Q8.南三陸で安心して出産、子育てできる医療サービスが備わっていると感じますか。 \*

- そう感じる
- 少し感じる
- あまり感じない
- ...

感じない

Q9. (Q8) でなぜそうお答えになったのか理由を教えてください。

記述式テキスト (短文回答)

Q10. 震災前後で、子どもに対する医療で変化を感じたことはありますか。\*

はい

いいえ

セクション 8 以降 次のセクションに進む

9 セクション中 9 個目のセクション

## セクションタイトル (省略可)

✕ ⋮

説明 (省略可)

Q11. 「はい」と答えた方に質問です。どのような部分に変化を感じましたか。

記述式テキスト (短文回答)

このアンケートの質問以外で、あなたが子育てや医療に対して日頃感じていることがありましたら、自由に記述ください。

記述式テキスト (短文回答)



# 報告書

## 『南三陸で被災した中学生の進路』

18FS023 阿部蓮、18FS165 小林大起、18FS389 三浦花梨

### ●もくじ

#### 要約

#### はじめに

- (1) 調査の動機
- (2) 調査の背景
  - 1) 震災当時の被害状況について
  - 2) 震災当時の学習環境について
- (3) 問題意識

#### 1.調査の概要

- (1) 調査の方法と手順
- (2) 調査分析手法

#### 2.調査結果

- (1) 調査対象者の概要
- (2) 分析結果
- (3) 調査の分析

#### 3. 全体の考察

- (1) まとめ
- (2) 今後の課題

#### 要約

私たちは、東日本大震災が起きた当時

中学生だった南三陸の学生を対象に、震災によって変化した学習環境の変化や進路決

定について調査をした。調査方法は、震災後も南三陸に残った人、震災後南三陸から離れた人の2つのグループに分け調査を進めた。結果、学習環境の変化や進路決定において不安や悩みがあっても誰かに相談することはなかった、南三陸に残った・離れたという違いはあるが、3名とも地元貢献したいという思いがあるということが分かった。

## はじめに

### (1) 調査の動機

調査の動機は、震災後の南三陸の中学生は震災当時から現在に至るまで進路決定をする際どのような困難があったのか調査をしたいと考えたからである。

私たちのグループは中学生に対する支援に興味・関心をもっているメンバーが集まっている。昨年それらの分野に関する調査について、TEDIC（石巻市やその近辺で子ども支援を行っている団体）やプロジェクトM（東日本大震災の過去とその教訓を語り継ぐ活動と、若い世代が地域の中で交流を実践する活動を通して、地域や社会に対する若者の関わり方を探っていくプロジェクト）を対象に調査を行った。今年もまた子ども・若者支援について学びを深めたいと考え、震災当時中学生だった南三陸の子ども・若者を対象とする調査をすることにした。

### (2) 調査の背景

#### 1) 震災当時の被害状況について

南三陸町は宮城県沿岸北部に位置し、養殖業、水産加工業が盛んな三陸地方の典型的な街の一つであった。そして、過去の各種災害の経験から、毎年防災訓練を実施するなど災害に強いまち作りを進めてきていたが、東日本大震災では津波は町の中心部を襲い、住宅の約70%がほぼ全壊した。また、町役場をはじめ、警察署、消防署、公立病院も大きな被害を受け、中でも防災対策庁舎においては、最後まで避難を呼びかけていた多くの職員らが犠牲となった。南三陸町での死者は620人、行方不明者は211人と多くの尊い命を失い、建物や町全体が甚大な被害を受けた。そんな東日本大震災から約10年が経とうとしている中で、災害廃棄物の処理が完了し、44箇所被災していた交通網や町や県が管理している23の漁港の復旧、復興が完了している。しかし、震災以前より減少傾向にあった町の人口は、震災で甚大な被害を受けたこと、長期間に渡る仮設住宅での生活を余儀なくされたこと等により、大きく減少していた。そのため、地域を活性化するため等の地域としての復興はまだ終わっていないと言える。



【参考引用】

・宮城県南三陸町 東日本大震災による被害の状況について

<https://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/17,181,21,html>

・宮城県南三陸町 東日本大震災からの復興状況

<https://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/6,0,90,html>

・東日本大震災からの復興状況～南三陸町の状況～

<http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/index.cfm/6,7752,c,html/7752/20160128-135236.pdf>

2) 震災当時の学習環境について

インタビューの対象者である A さん、B さん、C さんが震災の被害を受けたのは中学 2 年生の 3 月頃だった。

B さん、C さんが通っていた中学校は、津波に流されてしまい使うことはできなかった。そのため、近くの廃校になった小学校を借りて南三陸近郊の小・中学校が一緒に使っていた。中学校の再開は、5 月 10 日頃だった。そのため震災発生から 2 か月ほど学校に行けてなかった。震災の影響で授業の再開が遅れていたため、授業内容も少し

遅れていた。しかし、ボランティア活動による放課後学習支援などでカバーをした。

A さんが通っていた中学校は、学校が避難所になっていたりして全く勉強ができなかった。家に置いていた教科書なども津波で全部流されてしまった。中学校の再開したのはゴールデンウィーク明けだった。学校が再開したものの、体育館に避難物資が来ていたり、ヘリコプターが来たりもするのであまり集中できる環境ではなかった。1, 2 年生の復習をする教科書は先輩からのおさがりで勉強していた。7 月前あたりに関西から勉強を教えてくれるボランティアの

大学生が来てくれた。放課後 1, 2 時間程度勉強を教えてもらえた。

また、部活動に関しては、道具などは津波によって全部無かったが、いろんな方から支援を頂いて、道具やユニフォームを揃えた。部活の練習場所は当時間借りしていた小学校から 15 分くらい歩いたグラウンドで練習をした。また、中体連があったのは、学校が始まってから 1 か月半後くらいだった。

### (3) 問題意識

南三陸で被災した中学校は、学校が津波で流れてしまったり、または、学校が避難所になっていたりして、震災直後は学習できる環境ではなかった。このような学習環境の変化によってどのような影響を受けたのか。また、その影響によって進路の変化などはあったのかということに注目していきたい。

また、今回のインタビューでは、南三陸に残った方と南三陸から離れた人方、合計 3 名の方にインタビューを行い、震災当時から現在に至るまで進路決定をする際どのような困難があったのか調査した。その中で、3 人とも被災状況はほとんど変わらないのに大学に進学する・しないの違いがあることが分かった。なぜこのような違いが生じたのか調査を進めていきたい。

## 1. 調査の概要

### (1) 調査の方法と手順

私たちは、震災が起きた直後中学生だった方を対象に、震災後も南三陸に残った人、震災後南三陸から離れた人の 2 つのグループに分け調査を進めた。

インタビュー調査当日は、コロナ禍でも安心・安全にインタビューができるように ZOOM を利用した。インタビューの日程が調整出来次第メールで ZOOM の URL を送信した。

また、インフォームド・コンセントについては、事前に、調査手法、調査結果の取り扱い、公表方法等について同意依頼を作成したものをメールで送り、先方の了承を得た。

アポイントの取り方としてはメールを活用し、インタビューの承諾や日程を調整した。

調査対象者にインタビューを依頼したところ、8月3日(火) 20:00 にオンラインでインタビュー調査を受けていただけることになった。また、最初にインタビューを受けていただいた M さんの紹介で A さんにもインタビューを依頼し、10月15日(金) 20:00 にオンラインでインタビュー調査を実施した。

### (2) 調査分析手法

利用する調査方法としては、相手の反応やその場の状況に応じて質問の順番や質問内容を変更したり、追加・削除したりすることができる「半構造化面接法」で実施した。これは積極的に参加を求める方式が馴染むと考えたためである。

インタビュー調査で事前に準備していた質問事項は以下のとおりである。

**(南三陸に残った方)**

- ・震災によって学習環境の変化はあったか
  - ・震災後、学習面で困ったことはあるか
- また、進路について不安を感じたことはあるか

(何らかの事情で地元に残らなきゃいけないかったのかなど)

- ・当時、進路について相談する場所があったのか

(中学から高校、高校からその先への進路)

- ・当時、心のケアをするサービスはあったのか

また、経験したことはあるか

- ・今振り返った時、あの時もしかしたら心のケアに関するサービスなどを受けていたかもしれないと感じたことはあるか

- ・進路決定をする際に大切にされたことはあるか

・高校卒業後、どうして大学進学を選択をしなかったのか

- ・なぜ南三陸に残ろうと思ったのか

- ・南三陸に残ったがでていきたいと思ったことはあるのか

- ・一般企業を務めた後、南三陸観光協会に

転職したとあるか

また、きっかけなどはあるか

- ・南三陸から離れた人のことをどう思うか
- ・南三陸で働く場所が少ない点についてどう思うか

**(南三陸から一度離れた方)**

- ・なぜ南三陸に残ろうと思ったのか
- ・当時、進路について相談する場所があったのか

・南三陸に残ったがでていきたいと思ったことはあるのか

- ・当時、どのような悩みを持っていたのか
- ・当時、心のケアするサービスがあったのか

また、受けたことはあるか

- ・震災後学習再開ができたのはいつか
- ・震災後進路について考えることができたのはいつからか

・震災後進路が変わった人と変えなかった人はどれくらいいるのか

- ・進路が変わった人の理由はあるのか

**2.調査結果**

**(1) 調査対象者の概要**

	Aさん	Bさん	Cさん
年齢（震災当時の学年）	25歳（中学2年）	25歳（中学2年）	25歳（中学2年）
性別	男性	男性	男性
仕事（2021年現在）	南三陸町内の観光に関わる業務	南三陸町で林業	仙台市内の企業
南三陸に残ったか	残った	残っていない	残っていない

## (2) 調査の結果

(南三陸に残った方・Aさん)

①Q 震災当時から現在までの進路について  
A.Aさん

震災当時は中学2年生だった。卒業後は地元の高校に入学。高校卒業後は登米で車関係の会社で1年間働いた。その後、石巻市の役場の観光課に臨時職員で就職。1年の任期を終え、観光業に携わりたいと思っていたところ、南三陸町観光協会の職員募集を見かけ応募した。今年、就職して5年目になる。

Cさんとは南三陸近郊で出会った。当時は親しい仲というわけではなかったが、同じ観光業界で働いていることをきっかけに話すようになった。

②Q 震災によって学習環境の変化はあったか

A.Aさん

被災直後は、学校が避難所になっていたりして全く勉強ができなかった。家に置いていた教科書なども津波で全部流されてしまった。勉強をする以前に、がれきの撤去や地域のお手伝いをする方が大事であった。学校が再開したのはゴールデンウィーク明け。幸い、中学校は津波に流されなかった。学校再開したものの、体育館に避難物資が来ていたり、ヘリコプターが着たりもするのであまり集中できる環境ではなかった。避難していた場所では高齢者の方が多く、部屋の明かりは19:30頃になると消えてしまう。そのため、学校から帰ってきた後の避難先では勉強ができなかった。

1, 2年生の復習をする教科書は先輩からのおさがりで勉強していた。

7月前あたりに関西から勉強を教えてくれるボランティアの大学生が来てくれた。放課後1, 2時間程度勉強を教えてもらえた。

③Q 震災後、学習面で困ったことやストレスなどはあったか

A.Aさん

学校には当時避難していた集会所にはいない親しい友達が周りにいたから、集中できる環境でなくてもそれはそんなに苦ではなかった。友達と一緒に話したりするのが楽しかった。

普段から勉強をまじめにやってこなかったため、勉強が遅れたり、ついていけなかったらどうしようという不安はあった。

④Q 震災後、進路についての不安はあったか

A.Aさん

津波によってJRなども全部流されてしまったため、震災直後は通学手段があまりなかった。

しかし、徐々に復旧し始め、BRT(電車で代わるバス)などができたため、地元の高校に通うことができた。

そのため、震災があったから進路を変えるということとはなかった。

また、進路について考える時、どうやったら親に迷惑をかけないで学校行けるかを考えていた。

⑤Q 中学卒業後の進路決定の際、相談する場所はあったのか?

A. A さん

学校内外にはない。状況が状況だった。学校の外に出れば震災関係の支援の方が多かった。学校に行っても授業の遅れがあったため行事も変わっていた。

大学生に勉強を教えてもらいながら色々な視野の広げ方、大学について教えてもらった人たちも多かった。大学生の支援員がいたのは自分たちにとって特別だった。

⑥Q 高校卒業後の進路決定を際、相談する場所はあったのか？

A. A さん

中学卒業時と変わらない。高校進学の際は先生も考えてくれていたが高校卒業後の進路選択の際は学校にある資料から探すぐらいしかなかった。進路相談は誰かに相談することはなく自分で見つける事がふつうだった。

⑦Q 進路決定の際に大切にしたこと

A. A さん

高校卒業後の進路決定の際明確な目標はなかった。

震災前→大学に行きたかった

震災後→家が流され、祖母の病気などが原因で進学は断念

地域で色々やっていく中で地域のために何かしたいという思いを持った。

車の営業をしていたが、自分の思い描いている地域貢献とは違った。

→市役所の観光課へ 自分がやるべきこと、こうしていきたい指針ができ、やりたいことが明確になった

⑧Q 当時心のケアは受けていたのか

A. A さん

A さん自身ひとりで考えるタイプだった。自分からいかず、誰かから言われると言われれば行っていた。

自分で考えて納得していたのであったとしても行かない。

振り返るとやはり自分から行っていない。落ち込んでいて、こういうのがあるからやってみたらと言われると行っていた

まず、考え込んでしまうことがなかった。同級生など色々な人が支えてくれたため、進路

で悩むことがなかった。

同級生に笑わせてくれる人たちがいて、周りに恵まれていた。

先生に言われたら行っていた。紙だけだと行っていない。

聞いていればもっと楽になっていたかもしれないが、当時の事を考えるとやはり行っていない。

⑨Q 高校卒業後、南三陸に残った理由

A. A さん

震災前は外へ出ていき、外で働くと思っていたが関わった大人たちをみて、すごい人たちに囲まれて生きてきたことが分かった。自分もこの町で誰かのために役に立ち、何かをしたいという気持ちが強まっていった。社会人になって自分のやりたいことが明確になった。

⑩Q 現在、南三陸に残っているが南三陸から出ていきたいと思ったことはあるか？

A. A さん

今も出ていきたいと思う。ずっと南三陸しか見ることができていないため、1回出て、外の知識をつけてまた戻ってきてこの町に新しい外の目線を入れていきたい。一か所にいると考え方が固定され、50~60になった時に変化を起こせないと思っている。

⑪Q.ハローワーク気仙沼では有効求人倍率が1.51倍(前年度同月より0.14増加)と上がって来ているが、1度地元を離れた若者の中で地元に戻ってくる人が少人数であることについてどう思うのか。

A. Aさん

それはそうだよなって思う。お金が欲しいなら都会に働きに行くのが多く、地方に貢献したい人しか残らない。南三陸に残ってもらうことや知ってもらうために、語り部やSNSで情報発信してはいるが、来る人が少ないのが現状。これが田舎町の仕事の形だと思う。

インスタグラムに南三陸の情報を乗せても反応してくれる方が5.60歳しかいない。

⑫Q. 少子高齢化の中、若い世代の力が必要でもどうしたら良いか試行錯誤中という感じですか？

A. Aさん

若い世代で大学進学のために他県に出たあと、また戻ってきたいという人は増えてきている。震災があって、若い世代が町の良さに気づいてくれた。このような人達を増やすために、自分たちの代が自分たちの目線で発信をしていく必要がある。

⑬Q.一度南三陸から離れて、また帰ってきた人に対する市からの支援はあったりするの？

A. Aさん

補助制度や事業所とかでも支援をしようという動きにだんだんできてきている。地域の産業に触れて貰えるようなアルバイトを高校生対象に行っている。しかしコロナの影響でなかなか難しい状況。

⑭Q.観光協会で働いてみてのやりがいや良かったこと。

A. Aさん

イベントでは、町に来てくれる方や町の子供たちが活躍できる場を提供していて、将来働ききっかけや町での思い出にしてもらうことが出来ているのが嬉しい、物産では、多くの事業所や町外のお客さんと接点ももらえているのでそういった方に南三陸を知ってもらうきっかけになる。語り部では、最初は震災のことを話したいと思っていたが、話をしていくうちにお礼の手紙やお言葉を頂いたことがあり、それが今後のその人の防災意識や知識に役立つのならそれほど自分の経験が無駄になることは無いと考えが変わり、震災を知らない人や若い世代に話をしたいと思うようになったし、やっている意味があるなと感じた。



(南三陸から一度離れた方・Oさん、Mさん)

⑮Q なぜ一旦、南三陸からでたのか？

A. Bさん

当初は地元でなにかしたいという目標はなかったが、一度外に出たいとは思っていた。きっかけは高校だった。全国から大学生のボランティアや学習支援に来てくれて、大学生と話すことで大学もありだと思えるようになった。大学がありだと思えた理由は自分の考えを広げられたり、新しい価値観を見つけられたり、深いところを勉強できるためである。そのような経験があったため進路の幅が広がった。

A. Cさん

震災があり、大人や大学生との出会いが三浦さん自身大きな体験となり、価値観が変わった。中学生の頃はその地域だけのコミュニティであったが、外から来た人たちから自分の知らない価値観や世界があると学んだ。また、町のために何かをしたいと考えており、外からできることを探したり、外を知って街に戻ることでより町のためになると思ったりしたため南三陸から出ることにした。

⑯Q 当時、進路決定するときに相談する場所があったのか？

A. Bさん

自衛隊に憧れを抱いていて、自分の意志で入試などを調査した。  
相談することはなかった。

A. Cさん

消防士という夢があった。家庭を支えたいことからすぐに働くことができる工業高校か色々なことに挑戦し、選択肢を広げられる普通高校で悩んでいたが普通高校に進学することを選択した。その際、自分の意志で選択した。

⑰Q 震災直後の悩みについて

A. Bさん

学校があった時はめんどくさいため行きたくないと思っていたが、いざ学校が無くなったら複雑な気持ちになり行きたいと思うようになった。先が見えないなどの不安はあったが悩みはなかった。

A. Cさん

震災直後は次の日や避難所生活を乗り越えるかが悩みだった。  
これからどうなっていくだろう、また昔みたいにできるのかという不安があった。

⑱Q 震災が起きた直後、心のケアをするサービスはあったか。または、受けたことがあるか

A.Cさん

学校にカウンセラーはいた（震災などは関係なく）

でも、そのサービスを利用したことはなかった。

A.Bさん

あまり頼ったような実感は無かった

⑲Q 今振り返ってみてあの時ケアを受けて

いたのかもしれないと思う瞬間はあったか  
A.B さん

振り返ってみて思う一番のケアは、当たり前前に学校に行けて、当たり前前に友達や先生と喋れるようになった生活や、環境だと思う。

震災による津波で何もかもなくなってしまったが、学校はちゃんと再開できた。

そこには同じ境遇で頑張っている仲間を乗り越えたが近くにいたため、その日の大変だったことなどを周囲の人と話すことができた。辛いことなどを気兼ねなく話せる人が近くに居たことが心の支えになっていたと今振り返ってみて思った。

避難所にハンドマッサージをするグループが来ていた。それを受けていた時とても和んだ。

ハンドマッサージだけではなく、他愛もない話も聞いてもらうことで心があたたかくなったり、身体もほぐれた。という記憶が印象に残っている。

A.C さん

サービスというサービスを受けた実感は正直ない。

震災後、いろんな方たちとの出会いの中で自分の気持ちに整理をつけることができたと思う。出会うことでいろんなことを吸収することができた。もちろん震災の話や、それ以外の話をしながら交流を深めることによっていろんな話をするようになった。それが自然と心のケアになっていたのではないかと考える。

⑳Q 南三陸から一度外に出てまた南三陸に戻ってきたと思うのですが、なぜ地元に戻

ろうと思ったのか。

A.B さん

高校生や大学時代から地元に戻って何かを貢献したいという目標はずっとあった。

実際に大学を卒業後、地元に戻り2年間働いた。しかし、自分の思い描く貢献とは違う点について消化しきれないことがあり、もう一度地元を離れることを決意した。今もその目標は変わっていない。今は南三陸から離れて仙台にいるが、そこで何か地元で貢献できることはないか考えている。いずれは地元に戻りたいと考えている。

A.C さん

高校生から大学生の間地元に戻ろうと思っていなかった。しかし、大学に出て、清水先生や他の大学の先生方から震災等の子ども支援についての声をかけてもらったり、サポートをしてももらったことをきっかけに、なにか自分たちで地元で貢献することをしたいと思えるようになった。大学時代に首都圏の大学生を南三陸に案内をするというツアーを企画した。それを4年間くらい続けていた。地元のことを好きじゃないと案内できないんだなと思った。それらの活動を通していろんな人と話をしたことで、今自分にできることをやりたいなと思った。その時に、地元に戻って、地元で何かに関わりたかった。その時まだ大学生ではあったが、途中で大学を辞めて、林業の専門学校に行って、現在は地元で林業に関わる仕事している。

㉑Q 震災後に学習を再開することができたのはいつごろか

A.B さん

5月10日ころに学校が再開した。そのため2か月ほど学校に行けてなかった。

②Q 震災後、進路について考えることができたのはいつからか

A.Bさん

震災があったのは中学2年生の3月頃だった。進路については中体連が終わった時期あたりから本格的に考え始めた。

震災の影響で授業の再開が遅れていたため、内容も少し遅れていた。しかし、ボランティア活動による放課後学習支援などでカバーをした。

A.Cさん

中学から高校に上がる時、具体的な目標をもって進学を決めた。

高校のオープンキャンパスに行ったりもした。

③Q 震災直後でも中体連をすることができたのか。練習する環境はあったのか。

A.Cさん

大会があったのは、学校が始まってから1か月半後くらいだった。

道具などは津波によって全部無かったが、いろんな方から支援を頂いて、道具やユニフォームを揃えた。

野球部は、近くに間借りしていた場所で練習をしていた。南三陸の校舎ではなく、隣の登米市の廃校になった小学校を南三陸近郊の小・中学校が一緒に使っていた。練習場所は曾於湖から15分くらい歩いたグラウンドで練習をした。

A.Bさん

ユニフォームなどは大半津波に流されてしまった。そのため、支援物資でユニフォームをもらい、ラケットなどはある物使って試合をした。練習環境は、間借りしていた小学校の体育館は地域の人々の避難場所であったためそこで練習することができなかった。そのため、小学校の近くのコミュニティセンターで練習をしていた。

震災直後ではあったが何とか部活の練習をすることはできた。

④Q 震災後に進路が変わった人と変えなかった人について

A.Bさん

避難先が南三陸町出なく登米市に移った人や、親戚の家に避難した人もいたので高校の進学先が変わった人が増えた。だいたい気仙沼高校とかに大半が行く予定だったけど、震災の影響で佐沼や石巻、涌谷などに分散した。

A.Cさん

住む場所が変わったことが大きい。三浦さんの場合は、震災がきっかけで地域に貢献したいと思えた。

⑤Q 震災後に進路決定できていない人がどんな場面で困っていたか

A.Bさん

高校選択は、通いやすさが大切でどれだけ頑張って勉強していた子でも仙台とかの高校に一人暮らししてまでは行かなかった。

A.Cさん

震災関係ないけど、中学生のうちに将来のこととどれだけ考えられるか。

南三陸町は高校の選択肢が少なく、近くに高校に入る風潮があるため遠いから仙台とかには移れなかった。

A.C さん

高校の友人は 100 人いて、戻ってきたのはごくごく僅か。帰ってきても働く場がない。

⑳Q.大学を経て、地元に戻ってきて活躍している人はいるのか。

A.B さん

10 人大学進学した中で 3 人。その 3 人も大学でツアーをやっていて、地元で頻繁に関わっていた。

また、3 名のインタビュー内容をさらに分かりやすいようにするために、以下のようなインタビュー内容を比較できる表を作成した。まとめ方は、類似している質問を抽出し、共通点や相違点があるか簡潔にまとめた。

【インタビュー内容を比較した表】

	A さん	B さん	C さん	備考欄
震災直後の学習環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校は津波に流されなかった</li> <li>・勉強を教えてくれるボランティアの大学生が来てくれた (質問②)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二か月くらいは勉強できず、ボランティア活動による放課後学習支援でカバーした。(質問②)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティア活動による放課後学習支援でカバーした。(質問②)</li> </ul>	<p>【共通点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習ボランティアを受けていた</li> </ul>
学習面で困ったことやストレスなどはあったか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集中できる環境でなくてもそれはそんなに苦ではなかった</li> <li>・友達と一緒に話したりするのが楽しかった</li> <li>・普段から勉強をまじめにやってこなかったため、勉強が遅れたり、ついていけなかったらどうしようという不安はあった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>震災直後は、勉強することができず、いつ学校に行けるようになるか、先が見えず、不安があった。(質問①⑦)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まずは次の日や避難所生活を乗り越えるかが悩みだった。</li> <li>・また昔みたいになれるのか不安だった。(質問①⑦)</li> </ul>	<p>【共通点】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習環境の変化による悩みや不安があった</li> </ul>

南三陸で被災した中学生の進路

震災当時心のケアを受けたことはあるか	・なかった (質問⑧)	・なかった(質問⑱)	・なかった(質問⑱)	【共通点】 ・震災当時心のケアを受けたことはなかった
高校へ進学する進路についての不安はあったか	・津波によってJRが全て流されてしまい、交通手段があまりなかったり、進路について考える際にどうやったら親に迷惑をかけないで学校に行けるかの不安があった。(質問④)	・高校選択は通いやすい場所を希望していたため不安はなかった。(質問⑱、⑳)	・消防士という夢をとるか家族を支えるために就職するか悩んでいた。(質問⑱)	
進路について相談することはあったか	・学校で相談する場はなかった。学校外では震災関係の支援の場があった。(質問⑤)	なかった。(質問⑱)	・自分の意志で決定したため利用していない。(質問⑱)	【共通点】 ・相談することはなかった
高校卒業後の進路	・登米の車関係の会社に就職(1年間勤務) ・観光業に携わりたいと思い、石巻市の役場の観光課に臨時職員で就職。(1年間勤務) ・南三陸町観光関係の仕事に就職。(現在、5年目)(質問①)	・関東の大学に入学。 ・南三陸での夢の実現のために大学を中退し、林業の専門学校に入学。 ・専門学校を卒業後、南三陸に戻り、林業を営む。	・仙台市内の大学(4年間)	
進路について相談したか	・相談する場はなく、自分で学校の資料を探していた(質問⑥)	・なかった。(質問⑱)	・相談する場はなく、自分の意思で選択した。(質問⑱)	【共通点】 ・相談することはなかった

進路決定をする際に大切にされたことはあるか	・地域のために何かしたいという思いや支援に来てくれた大人たちとの関わりによって、自分のやりたいことが明確になった。(質問⑦)	・大学で、清水先生や他の大学の先生方からの震災等の子供支援についての声や、サポートをしてもらったことをきっかけに、地元で貢献できることをしたいと思うようになった。(質問⑩)	・外から来た人たちから自分の知らない価値観や世界があるということを学んだ。一回外の世界を知り、そこから町に戻って活躍したい。(質問⑫)	【共通点】 ・外部の人などとの交流が進路決定のきっかけになっている ・地域に貢献したい思いがある
なぜ南三陸に残ったのか、または、離れたのか	・地域の復興に関わる大人の姿をみて、地元で誰かの役に立ちたいと考え、南三陸に残った。(質問⑨)	・ボランティアや学習支援に来ていた大学生との交流を通して、大学に行くことで視野を広げたい、新しい価値観を発見したいと考え、南三陸から離れた。(質問⑮)	・震災を通して出会った大人や大学生から自分の知らない価値観や世界があると学び、外からできることを探したり、外を知って街に戻ることにより町のためになると考え、南三陸から離れた。(質問⑮)	【共通点】 ・震災を通して出会った大人やボランティアの大学生との交流が進路選択のきっかけになった ・地元で貢献したいという思いがある 【相違点】 ・Aさんは南三陸に残ったが、BさんとCさんは南三陸から離れた
地元に戻りたいと思うか	・高校卒業後も地元で仕事をしているが、地元から出てみたいと思う。ずっと南三陸しか見ることができないため、外の知識をつけてまた	・高校生から大学生の間地元に戻ろうと思っていたが、震災における子ども支援のサポートをしてもらったことや、大学時代に地元に関	・高校生や大学時代から地元に戻って何かを貢献したいという目標があった。(質問⑫) ・今は南三陸から離れて仙台にいるが、そこで何か地	【共通点】 ・地元だけではなく、一度地元から離れることで新しい知識をつけたい ・地元で貢献

	<p>戻って、そして、この町に新しい外の目線を入れていきたい。(質問⑩)</p>	<p>わる企画・運営に携わったことをきっかけに、地元で何かしたいと思った。(質問⑳)</p>	<p>元に貢献できることはないか考えている。いずれは地元に戻りたいと考えている。(質問㉑)</p>	<p>したい 【相違点】 ・AさんとCさんは高校時代から地元で地域に貢献できる仕事をしたいと思っていたが、Bさんは高校生から大学生の間地元に戻ろうと思っていたいなかった</p>
--	--	--	---	--

### (3) 調査の分析

南三陸で被災をした当時中学生だった3名の方からの調査を経て、インタビュー内容を比較してみたところ共通点や相違点が分かった。

その中でも特に注目したい点が三つある。

一つ目は、学習環境の変化による悩みや不安はあったが、それを誰かに相談することはなかったという点である。学校が津波で流されたり、授業がなかなか再開できない不安な状況の中ではあったが、学校のカウンセラー室を利用したり、心のケアをするようなサービスも受けたことがないということが分かった。

二つ目は、進路選択において困ったことはあったが、それを誰かに相談することはなかったという点である。もともと地元の高校に進学する風潮が強く、選択肢も少ない。そのため、進路選択において相談することはないということが分かった。また、3名の方が高校に進学する時には震災から1年が経っていたため、通学路の復旧もしてお

り、地元の高校に進学することができた。

三つ目は、進路選択において最終的には地元で貢献したいという思いがあるという点である。Aさんは南三陸に残った、BさんとCさんは南三陸から離れたという相違点はあるが、地域の復興に関わる大人の姿をみて、地元で誰かの役に立ちたいと考えたり、震災を通して出会った大人や大学生から自分の知らない価値観や世界があると学び、外からできることを探したり、外を知って街に戻ることでより町のためになると考え、南三陸から離れたということが分かった。

## 3. 全体の考察

### (1) まとめ

・震災直後の学習環境の変化

南三陸町は宮城県沿岸北部に位置している。東日本大震災では津波によって町の中

心部を襲い、住宅の約70%がほぼ全壊した。Bさん、Cさんが通っていた中学校は、津波に流されてしまい使うことはできなかった。そのため、隣の登米市の廃校になった小学校を借りて南三陸近郊の小・中学校が一緒に使っていた。

学校が再開したのはゴールデンウィーク明けであった。学校では、当たり前友達や先生と喋れるようになった環境があったこと、気兼ねなく話せる友達が近くに居たことで勉強に集中しにくい環境ではあったがそんなに苦と思わず過ごすことができた。

#### ・相談しやすい環境づくり

震災当時、地域の復刻作業で勉強に手がつかないなどと生活が激変したり、学校が再開しても体育館に支援物資が来るため、人の出入りが多い環境や、ヘリコプターが着たりして、あまり勉強に集中しやすい環境と言えない中で、心にストレスはなかったのか、それを相談したことはあるか、あるいは受験生である子ども・若者が進路について相談することはあったのかインタビューをしたところ、特にそういったサービスを受けたことはないと言っていた。

インタビューを受けていただいたAさんは「私は、一人で考えて自己解決するような性格です。もし、そういったサービスがあっても自分から行かず、誰かから言われたら受けていたかもしれない。」と言っていた。

これらのことから、将来の進路選択や、震災による心のケアなどを受ける必要性があまり感じられなかったことに対して、サービスを提供する側になった時、自分からは積極的に参加することが難しい人もいるかもしれないため、なるべく情報の発信を積極的に行ったり、「一度受けてみませんか」

と丁寧に声をかけたり、普段から子どもとの関りが多い学校の先生からも情報の発信や提供、声掛けができるように工夫してみるなど、一部の間人だけでなく沢山の子ども達がサービスを受けることができるような取り組みをしなければならないと考えた。

#### ・進路決定をする時に大切なこと

進路決定において大切なことは、将来の選択肢を広げるために様々な体験をしたり、知識を得ることが大切であるということが分かった。

例えば、学生時代、将来の目標がはっきりしていなかったBさんは、震災を経験した時、全国からボランティアや学習支援に来てくれた大学生との交流によって、自分の考えを広げられたり、新しい価値観を見つけ、進路の幅が広がった。

これらのことから、沢山のことを経験していく中で自分のやりたいことを徐々に見つけていくことが進路決定において大切であると考えた。

#### ・南三陸に残った人と南三陸から離れた人の違い

また、南三陸に残った人と南三陸から離れた人の考え方の違いについて、決定的に違う点は、学生時代に大学生や大人の人との関りによる価値観の変化だと私たちは考えた。

例えば、南三陸から離れた人の考え方の中で、「震災後の大人や大学生との出会いや体験によって、町のために何かをしたいという価値観が変わった。あえて地元以外に出て様々な知識を得て地元に戻ることより町のためになると思ったため南三陸から出ようと考えた。」と言っていた。



その他にも、南三陸に残った人と離れた人の決定的な違いについて家庭の環境や金銭面も挙げられる。

## (2) 今後の課題

調査をする中で、大学を経て地元に戻ってきて活躍している人がごく僅かであるという課題があることが分かった。これは、地元である南三陸では働ける場所があっても給料が安いことなどから、大学などを経て地元に戻ってきて活躍する人は少ないということが分かった。

現在は、補助制度や事業所などでも支援をしようという動きが少しずつあるが、これからもっと若い世代が町の良さに気づいてもらえるように、自分たちの代が自分たちの目線で発信をしていく必要があると A さんが言っていた。例えば、現在南三陸町では、地域の産業に触れて貰えるようなアルバイトを高校生対象に行っている。

また、南三陸ではないが、宮城県の気仙沼市にある菅原工業さんでは、子どもや若者

に地元企業の魅力を伝え、担い手を育成する活動を行っている。特に、地元企業の重要な課題に人材不足を挙げ、「地域教育事業」をはじめた。具体的な活動としては、若手経営者が中学校に行き、会社の紹介をする。関心を持った子どもたちを職場体験で受け入れるなど、中学生と企業の出会いの機会を作る活動。また、気仙沼から仙台の大学などに進学した学生や、気仙沼に関心を持つ学生なら誰でも参加できるイベントを毎月実施している。この事業から、2021年春には弊社に5名の大学生が入社するなどの結果も出ている。

このように、子ども達が受けた体験や知識が、将来の選択肢を広げることや進路決定をする際に重要な要因になる。そのため、若い世代が町の良さに気づいてくれるように、自分たちの代が自分たちの目線で発信をしていくことが大切だと考えた。

【参考引用】「嫌いな地元」だった気仙沼を「国内外で共創を生み出す町」に変える。菅原工業・菅原渉さんの取り組み  
2021.11.29 12:52  
<https://drive.media/posts/30140>

## 追加資料

# 「南三陸で被災した中高生の進路」

---

調査へのご協力ありがとうございます。

今回の調査では、

“学生時代に受けたボランティアとの交流”、

“高校から就職するまでのこと”

についてさらに調査をさせていただきたいと存じます。

お忙しいところ大変恐縮ですが、アンケートへのご協力をよろしくお願いいたします。

### (1)震災直後におけるボランティアとの交流について

①震災直後、勉強を教えてくれるボランティアの大学生が来てくれたとお話されていましたが、学習面以外で、将来の進路についてなどの話はしましたか？ありましたら教えてください。

【回答】

### (2)高校時代におけるボランティアとの交流について

①高校時代に、地域に関わるボランティアなどに参加したり、運営に協力したりしましたか？ある場合は、具体的な内容と期間を教えてください。

【回答】

## 追加資料

②交流がある場合、その交流の中で今でも繋がりのある人はいますか？今は繋がっていないけど、数年間交流があったという人でも大丈夫です。（例えば、高校時代から自分の近況を報告したり、話したりする大人がいた。など）

③その中で今の進路に影響を受けた人はいますか？

【回答】

### (3)高校時代における進路決定について

①以前インタビューをした際、「祖母の病気などがきっかけで大学に進学しなかった」とお話をされていました。このことから、大学に進学しなかった要因の一つに金銭面や家庭の事情があったと考察しました。これについて、奨学金などの情報は学校等から提供がありましたか？あるいは奨学金の利用についてご家族からお話を受けたことはありますか？

【回答】

②金銭的な心配がなければ大学に進学する選択を選んでいましたか？

【回答】

## 追加資料

③以前インタビューした際、阿部さんは家庭への心配や親に迷惑をかけたくないという思いが強いのではないのかと感じたのですが、そのような思いと、地域の役に立ちたいという思いどちらの方が今の進路に強く影響していると思いますか？

【回答】

④進路決定をする際、ご家族とはどのような話をされましたか？

【回答】

以上で終了になります！ご協力頂き誠にありがとうございました！

# 資料編

この資料編では、ゼミ生たちがフィールドワークを実施するにあたって、事前に学んだ調査の方法論や調査者に求められる倫理的配慮に関するものを掲載しています。こうした基本を丁寧に押さえることを重視し、ゼミを運営してきました。大変室の高い内容となっております。ぜひご覧ください。

## 質問紙調査・Web 調査

18FS023 阿部連 18FS066 遠藤楓 18FS273 高橋博基  
18FS357 久戸望 18FS438 吉田彩

### 【目次】

1. 質問紙調査
  - (1) 概要
  - (2) 手順
  - (3) メリットとデメリット
  - (4) 留意点
  - (5) 事例
2. Web 調査
  - (1) 概要
  - (2) 手順
  - (3) メリットとデメリット
  - (4) 留意点
  - (5) 事例
3. アンケート作ってみた
  - (1) 調査企画・設計
  - (2) 調査票の作成
  - (3) 留意点
4. 参考文献

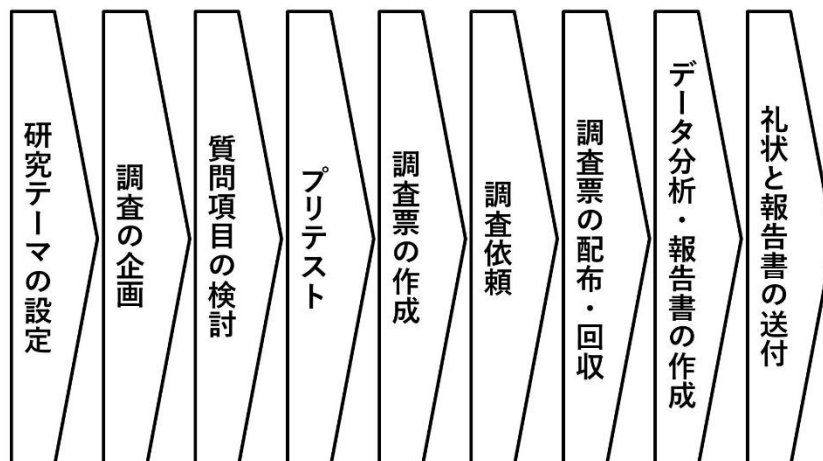
### 1. 質問紙調査

#### (1) 概要

質問紙調査とは、意識や行動についてのデータをアンケートを通して、組織的に収集する方法であり、社会調査において最も採用頻度の高い量的調査である。質問紙調査は、調査の対象者自身が調査票の質問を読み、回答を記入する自記式と調査員が調査対象者の回答を聞き取って記入する他記式の二つに分かれる。自記式は、調査者が調査票を配布し、調査対象者自身が記入し、一定期間後にそれを回収する留置調査法、郵送にて調査票の配布・回収を行う郵送調査法、調査対象者に一定の場所に集まってもらい、その場で配布・記入・回収を行う集合調査法、調査対象者がインターネットのホームページ（フォーム）から直接回答するインターネット調査法があり、他記式は、調査者が調査対象者に面接し、質問紙の順に口頭で回答を得、調査員が記入する面接調査法、調査

者が電話をかけ、質問を読み上げながら回答を得る（アメリカでは一般的）電話調査法などの種類がある。

## (2) 手順



まず、研究テーマを設定し、その研究テーマについての調査企画を行う。調査の企画は、調査規模や調査対象者、調査方法などを決める。続いて質問項目を作成する。質問項目は研究テーマに合わせて作成するが、研究テーマについての先行研究がある場合には、それらを参考にする。また、質問項目が適切であるかどうかを検討するため、プリテストを実施する必要がある。もし適切でなければ、再度質問項目を検討しなおす。このようにして質問項目が決まったならばそれらをくみ上げ、調査票を作成する。

これらの準備が終わったら、調査対象者に調査を依頼する。調査の原則はあくまでも「説明と同意」によって行わなければならない。つまり、調査の趣旨や意義、実施に関する手続きについて説明し、調査対象者がそれに同意して、初めて回答してもらうことが重要である。そして、同意が得られたら、調査票を配布し調査対象者に回答してもらい、回収する。回収された調査票は、すべてデータとして利用できるとは限らないため、エディティングを行う。エディティングでは、無回答や回答ミスをチェックし、通し番号をつける。さらにコーディングを行い、データを入力する。

データ入力では、主に Excel のようなスプレッド形式の表計算ソフトや MS-DOS のテキストファイルを用いる。表計算ソフトの場合、第一行に質問項目を、第一列に調査票の通し番号を入力する。テキストファイルの場合もほぼ同様である。

入力が終わったならばデータの分析に取りかかる。質問紙調査の場合、データの分析は主に統計処理である。統計処理は多くの手法があるが、研究テーマとデータの質（量的データか質的データか）に沿って適切なものを選ぶ。

適切な統計処理が終われば、その結果を解釈し、最終的に報告書にまとめる。また、調査対象者へは調査への協力を感謝した礼状を送る。場合によっては、報告書を添付する。

### (3) メリットとデメリット

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"><li>○時間や手間、経費が少なくて済む</li><li>○質問紙を配布すれば調査が可能</li><li>○同時に多くの人々を画一的調査できる</li><li>○一部の人から全体の状況を統計的に予想できる</li><li>○検査者による大きな差が生じにくい</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>△質問内容の理解度に差が出る →回答が多義的になる</li><li>△応答に消極的な人と積極的な人がいるため回答が多義的になる</li><li>△質問では聞き出しにくい情報がある ex) プライバシーに関する情報、 質問がタブーとされる情報</li><li>△統計的な方法では分析しにくい場合がある ex) 非常に少数しか存在しない事例</li></ul>

### (4) 留意点

#### ●妥当性と信頼性

- ・何かを測るためにはそれに適したもののさしが必要
- ・妥当性→作成した質問紙（の項目）は本当に測りたいものを測れているか
- ・信頼性→同じ被験者に繰り返し実施しても回答に違いはないか  
調査者が測ろうとしている対象に対して用いる尺度が適切なものであるかどうか  
繰り返し観測しても結果が変わらないかどうか

#### ●質問紙の内容

- ・高い回答率を得るためには重要なこと→質問紙全体のレイアウト、字体や文字の大きさ、文字の間隔、質問数、質問形式
- ・望ましくない例→何枚も質問紙があり「めんどくさそう」と思われるもの、自由記述が多い質問紙、同じような質問項目が何度も出てくるもの、1つの質問文が長いもの



(5) 事例

令和元年度「仙台市の防災に関する市民意識調査

仙台市  
SENDAI CITY

令和元年度「仙台市防災に関する市民意識調査」アンケート調査票

— 災害への備えについて —

問1. あなたの生活の中で、特に不安に思う災害を心配な順番に3つまで選び、下の回答欄にご記入ください。(あてはまるもの3つまで)

1. 地震災害	7. 大規模な山火事
2. 津波・高潮災害	8. 大規模な建物火災
3. がけ崩れなどの土砂災害	9. 原子力災害
4. 豪雨による洪水	10. 鉄道などの公共交通機関の事故
5. 強風による災害	11. 危険物や化学薬品などによる爆発・火災
6. 火山の噴火	12. その他 ※具体的に

あてはまる選択枝の番号を回答欄にご記入ください。

回答欄	1番目に心配なもの	2番目に心配なもの	3番目に心配なもの
-----	-----------	-----------	-----------

問2. ご自宅で、非常にすぐ使用できるように用意しているものをすべてお選びください。(あてはまるものすべてに○)

1. 食料・飲料水 ⇒問3へ	9. スマートフォン・携帯電話の充電用電池
2. 携帯ラジオ	10. その他 ※具体的に
3. 懐中電灯	11. 特になし
4. 乾電池	
5. 救急医薬品	
6. カセットコンロ	
7. 携帯トイレ・簡易トイレ	
8. 石油ストーブなど停電時でも使用可能な暖房器具	

問3. (問2で「1. 食料・飲料水」を選択した方にお伺いします。)  
ご自宅の備蓄量はおおむね何日分を用意していますか。食料と飲料水それぞれお答えください。

食料 ( ) 日分程度      飲料水 ( ) 日分程度  
※参考 大人1人1日に必要な食料の量(目安)：330g

【悪い例】

- ✖ 回答欄にある選択枝の数字以外で回答してはならない。(同様の回答方式に共通)
- ✖ 問2で「食料・飲料水」を選択していないのに、回答してはならない。(記述式の回答はすべて共通)

問4. 災害への備えについて、あなたや同居のご家族が取り組んでいることをお答えください。(①～⑧のそれぞれについて、あてはまる番号に○)

	A 取り組んでいる	B 取り組んでいないが、必要を感じている	C 取り組んでいないが、必要を感じていない
① 家族との連絡方法を決める	1	2	3
② 自宅から避難する場所、経路を決める	1	2	3
③ 風呂にいつも水をいれておく	1	2	3
④ 自家用車にこまめに給油をする	1	2	3
⑤ 窓ガラスの飛散防止対策をする	1	2	3
⑥ 食糧庫などに飛び出し防止器具をとりつける	1	2	3
⑦ 自宅の耐震化をする	1	2	3
⑧ ブロック塀の点検や倒壊防止を施す	1	2	3

◎表 (左上)

→簡潔にまとめられている

✖文章の羅列 (右下)

→情報量が多い

同じ文章が繰り返されている  
何度も読むのが面倒

<p>①家族との連絡方法を決める</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>何らかの取り組みをしている</li> <li>必要性は感じるが実施していない</li> <li>知らない・やり方がわからない</li> <li>必要性を感じない</li> <li>取り組みを必要としない(家族や自宅が該当しない場合など)</li> </ol>	<p>⑤窓ガラスの飛散防止対策をする</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>何らかの取り組みをしている</li> <li>必要性は感じるが実施していない</li> <li>知らない・やり方がわからない</li> <li>必要性を感じない</li> <li>取り組みを必要としない(家族や自宅が該当しない場合など)</li> </ol>
<p>②自宅から避難する場所、経路を決める</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>何らかの取り組みをしている</li> <li>必要性は感じるが実施していない</li> <li>知らない・やり方がわからない</li> <li>必要性を感じない</li> <li>取り組みを必要としない(家族や自宅が該当しない場合など)</li> </ol>	<p>⑥食糧庫などに飛び出し防止器具を取り付ける</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>何らかの取り組みをしている</li> <li>必要性は感じるが実施していない</li> <li>知らない・やり方がわからない</li> <li>必要性を感じない</li> <li>取り組みを必要としない(家族や自宅が該当しない場合など)</li> </ol>
<p>③風呂にいつも水をいれておく</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>何らかの取り組みをしている</li> <li>必要性は感じるが実施していない</li> <li>知らない・やり方がわからない</li> <li>必要性を感じない</li> <li>取り組みを必要としない(家族や自宅が該当しない場合など)</li> </ol>	<p>⑦自宅の耐震化をする</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>何らかの取り組みをしている</li> <li>必要性は感じるが実施していない</li> <li>知らない・やり方がわからない</li> <li>必要性を感じない</li> <li>取り組みを必要としない(家族や自宅が該当しない場合など)</li> </ol>
<p>④自家用車にこまめに給油をする</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>何らかの取り組みをしている</li> <li>必要性は感じるが実施していない</li> <li>知らない・やり方がわからない</li> <li>必要性を感じない</li> <li>取り組みを必要としない(家族や自宅が該当しない場合など)</li> </ol>	<p>⑧ブロック塀の点検や倒壊防止を施す</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>何らかの取り組みをしている</li> <li>必要性は感じるが実施していない</li> <li>知らない・やり方がわからない</li> <li>必要性を感じない</li> <li>取り組みを必要としない(家族や自宅が該当しない場合など)</li> </ol>

— ハザードマップについて —

※「ハザードマップ」とは、自然災害による被害を予測し、その被害範囲を地図化したものです。本市では、洪水・土砂災害・地震・津波のハザードマップを「仙台防災タウンページ」に掲載し、市内全戸に配布しています。

問12. あなたは本市のハザードマップをご覧になったことがありますか。あてはまるものを1つお選びください。(○は1つ)

1. 見たことがある ⇒ 問13～問15へ    2. 見たことがない ⇒ 問16へ

問13. (問12で「1. 見たことがある」を選択した方にお伺いします。) ご覧になったことがあるハザードマップをすべてお選びください。(あてはまるものすべてに○)

1. 洪水に関するハザードマップ ⇒ 問14へ  
 2. 土砂災害に関するハザードマップ ⇒ 問14へ  
 3. 地震に関するハザードマップ  
 4. 津波に関するハザードマップ  
 5. 内水に関するハザードマップ  
 6. 防災重点ため池に関するハザードマップ  
 7. わからない

- 4 -

【良い例】

◎用語解説を行っており、用語の理解と自治体が行なっている取り組みを合わせて紹介している。

— 防災施策について —

問23. 仙台市で実施している以下の取り組みなどを知っていますか。知っているものをすべてお選びください。(あてはまるものすべてに○)

<p><b>1. 地域版避難所運営マニュアル</b> 各避難所において地域の特性に合わせて作成した避難所の運営マニュアル</p>  <p>※写真は仙台市で作成したひな形など</p>	<p><b>6. せんだい防災のひろば</b> 防災や減災に対して関心を持っていたくことを目的とした体験型イベント</p> 
<p><b>2. 仙台市地域防災リーダー(SBL)</b> 防災に関する知識や技術を有し、それぞれの地域における自主的な防災活動の中心となる方々</p> 	<p><b>7. 仙台市津波避難訓練</b> 市東部において毎年11月5日「津波防災の日」に防災関係機関(宮城県警察、海上保安庁など)と合同で実施する避難訓練</p> 
<p><b>3. 仙台防災タウンページ</b> 災害から身を守るための基本的な知識やハザードマップなどをまとめた冊子</p> 	<p><b>8. 帰宅困難者対策</b> 一時滞在場所や支援に関する各種協定の締結、関係事業所への訓練指導など</p> 
<p><b>4. わが家と地域の防災チェック表</b> 家庭での地震に対する備えの点検を行うチェック表</p> 	<p><b>9. 仙台防災未来フォーラム</b> 東日本大震災の経験や教訓を未来の防災につなぐため、市民の皆さまが防災を学び、日頃の活動を発信できるイベント</p> 
<p><b>5. 仙台市防災・減災アドバイザー</b> 各種メディアや地域の防災講座などを通じ、市民の皆さまへの防災・減災の普及啓発を専門とするアドバイザー</p> 	<p><b>10. 仙台防災枠組 2015-2030</b> 2015年の第3回国連防災世界会議の成果文書で、2030年までの国際的な防災の取組み指針</p> 

- 8 -

◎施策を文字だけでなく、写真を使用して紹介している。

引用：防災に関する市民意識アンケート調査報告書（仙台市）

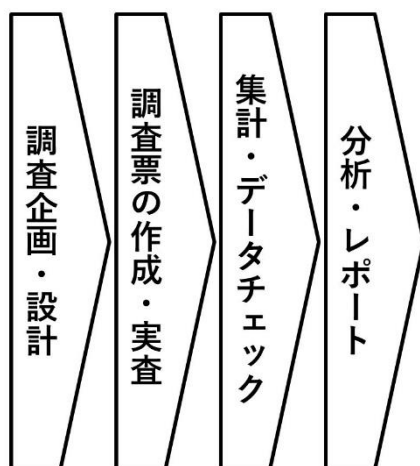
[http://www.city.sendai.jp/kekaku/kurashi/anzen/saigaitaisaku/torikumi/documents/02\\_r1anke-to-houkokusyo.pdf](http://www.city.sendai.jp/kekaku/kurashi/anzen/saigaitaisaku/torikumi/documents/02_r1anke-to-houkokusyo.pdf)

## 2. Web 調査

### (1) 概要

Web 調査とは、インターネットを利用して行う調査のことであり、ネット調査やインターネットリサーチと言い換えられることもある。Web 調査は、アンケート調査の一種で、「定量データ」と呼ばれる「量（金額や数量など）」や「割合（パーセンテージ）」のように数字で表現されるデータを収集する定量調査においてよく使われる。Web 調査が一般的になる以前は、紙の調査票を用いて行われる郵送調査や留置き調査などが主流だったが、それらと比べると Web 調査は、短時間で多くのデータを収集できるという特長がある。

### (2) 手順



どのような調査でも調査の企画・設計は非常に重要な工程になる。例えば、ある会社のマーケティング担当者が「シャンプーの売上が落ちてきた・・・何が問題なんだろう？」というマーケティング課題を抱えていたとする。このマーケティング課題に対して、「新鮮味が薄れてきたのか？」「市場環境が変わったのか？」のような仮説を立てることができる。これらの仮説を元に調査の企画・設計を進める。調査対象を誰にするのか、どのくらいの人数に訊けばいいのか、どんな質問をすればいいのか、といったこともこの工程で決めていく。

調査の企画・設計の工程で、この調査で明らかにしたいこと、目的が決まると、次の工程ではそれを実現するための調査票を作成していく。どんな質問をするかといったことだけでなく、如何に回答者に正確に答えてもらえるか、といったことにも十分な配慮が必要である。例えば、言葉の使い方や設問の順番、選択肢の作り方、補足説明の方法などを考慮しながら作成する。

集まった回答データは回答に抜けがないか、設問間で矛盾した回答がないか、いい加減な回答がないかといった視点でのチェックをする。これらのチェックに引っかかる回答は無効回答と判断され、回答データから削除される。

データチェックが完了したところで集計を行う。集計をすることで、調査結果が可視化され、パッと見て、このデータが何を意味するのか、どんな傾向にあるのかが分かりやすくなる。集計表、グラフの作成では、如何に分かりやすく表現するかが重要な点である。

集計されたデータに何らかの加工を加えたり、数値結果を比較したりすることで、その結果となった原因や理由を考えたり、新たな情報を導き出したりといった、集計データの分析を行う。これによって、調査の企画・設計の工程で考えた仮説が正しかったのか、間違っていたのかを明らかにする。

仮説が正しかったとなれば、仮説に沿った施策を後押しすることとなり、仮説が間違っていた場合でも、改めて施策を講じるといったアクションへと導くことができる。

### (3) メリットとデメリット

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> <li>○人の稼働が発生する工程を大幅に削減できる</li> <li>○時間短縮やコスト削減につながる</li> <li>○設問の遷移が容易かつスムーズにできる</li> <li>○間接的自記式であるため検査者の影響を受けない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>△調査対象者がインターネット利用者に限られる →高齢者への調査が困難な可能性</li> <li>△虚偽や代理など不正回答の恐れがある</li> <li>△ハードウェア上の障害が起こる可能性がある ex) 通信障害、サーバーダウン</li> <li>△回答者のコンピュータ・リテラシーのバラツキが影響を及ぼす場合がある</li> </ul>

### (4) 留意点

- インターネット利用者に限られることを考慮する
  - ・高齢者への調査を重視したい場合は、Web 調査と質問紙調査のアンケートを組み合わせることによって調査精度を高めることができる
- マルチデバイスに配慮する
  - ・パソコン、スマートフォンのどちらからでも同様のユーザーインターフェイスで簡単に回答できることは、正しい調査結果を得るためにも重要なポイントになる
  - ・Web 調査を行う調査会社を選定するときにマルチデバイスに配慮しているかどうか確認した方が良い
- 調査ボリュームを肥大させない
  - ・ボリュームがありすぎる調査票だと回答者が疲労してしまい、回答精度が落ちる危険性があるため注意が必要
  - ・調査ボリュームを肥大させないためには、調査設計の段階で何を明らかにするのか、そのために何を聴取すべきかを整理し、調査票作成の段階でもこれに立ち返ることが必要

## (5) 事例

**【該当者のみ】 実習先・期間の確認**

配属先と期間が決まっている人は、以下のフォームにお手数ですが記入をお願いします。

このフォームを送信すると、メールアドレスが記録されます。

**fs18066@tfu-us.tfu.ac.jp** ではないですか？アカウントを切り替え

\*必須

実習先名 \*

回答を入力

実習の開始日 \*

日付

年 / 月 / 日

実習の終了日 \*

日付

年 / 月 / 日

その他の実習等があれば直接書き込んでください。

回答を入力

以上です。ご協力ありがとうございました。

引用：清水冬樹先生からの Gmail

## 3. アンケート作ってみた

### (1) 調査企画・設計

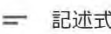










昨年フィールドワークを行なった「NPO 法人ベビースマイル石巻」を仮の調査対象とする。代表理事の荒木裕美さんの話の中で、活動内容を考える際に、参加しているお母さん方の会話の中やアンケート調査から希望や要望、困りごとなどを知り、参考にしているのだと伺った。普段の活動中の何気ない会話の中でも常にニーズを探り、それに応えられるよう、より良いサービス提供を目指しているのだという。この話から、利用者の生の声を知り、そこから必要とされる支援を発見することの重要性を感じた。そこで、まずは石巻市を対象地域として、これから石巻に必要な子育て支援は何かを調査するため、Web 調査を行う。質問紙調査ではなく Web 調査を活用する理由としては、ベビースマイル石巻の公式 LINE があり利用者が目を通しやすいこと、子育て中の保護者世帯はインターネット利用やスマホ操作に慣れていることが挙げられる。今回のよ

うな調査をする場合は、代表理事の荒木さんのご協力を頂き、公式 LINE でアンケート調査の URL を送信して利用者に回答を頂くことが必要になると考える。

## (2) 調査票の作成

今回の仮 Web 調査票は、「Google フォーム」を利用して作成した。まず、設定した調査目的や仮説を踏まえて質問内容を決定し、質問の順番等を決める。次に、質問内容を打ち込み、それに対応する選択肢を記入していく。Google フォームは、いくつかの回答形式があり、質問内容に応じて適切なものを選択する。最後に、プレビュー機能を使用し、誤字脱字がないか、回答者が質問内容を正確に読み取り答えられるように配慮されているかなどを確認し作成が完了する。調査票が完成したら、メールに直接送信またはリンクをコピーして LINE 等で送信するなどして回答を得る。この際に、Web 調査票（リンク）のみを送信するのではなく、調査者の紹介や調査の目的、調査以外で個人情報や回答内容を扱わないことなどを簡潔にまとめ、併せて送信することが必要だと考える。回答者の回答が終わると、円グラフや棒グラフなど、回答形式によって結果が自動的にまとめられる。

### Google フォームの回答形式

- |   |   |                            |
|---|---|----------------------------|
| ① |  | ①短文回答                      |
| ② |  | ②長文回答                      |
| ③ |  | ③単一回答、SA (Single Answer)   |
| ④ |  | ④複数回答、MA (Multiple Answer) |
| ⑤ |  | ⑤選択肢に規則性があるもの              |
|   |  |                            |
| ⑥ |  | ⑥レベル選択、尺度                  |
| ⑦ |  | ⑦表組み形式 (単一選択)              |
| ⑧ |  | ⑧表組み形式 (複数選択)              |
| ⑨ |  | ⑨日にち選択                     |
| ⑩ |  | ⑩時間選択                      |

## 子育て支援に関するニーズ調査（仮）

<https://forms.gle/JgBLxb2mFq6kq2cy9>

### （3）留意点

#### ●質問は簡潔にまとめる

- ・回りくどい文章や読みにくい文章になっていないか
- ・回答を強制させるような伝え方になっていないか

#### ●質問順序を考慮する

- ・事実を回答する質問は簡単に答えやすい  
→簡単に答えられそうだという安心感を抱き、テンポよく回答してもらえる
- ・事実確認を行いながら、回答者の頭の中を後半に必要な情報で埋めていき、本当に聞きたい質問をしたときに答えやすくなるように、回答者の脳内環境を作り出しておく

#### ●回答形式は「記述」よりも「選択」

- ・シンプルな形式のアンケートの方が回答者のストレスが少なく済む
- ・最後までアンケートに目を通し、回答してもらうことが重要

## 4. 参考文献

- ・宮本和彦・梶原隆之・山村豊『社会調査の基礎』社会調査 社会福祉調査【社会福祉士シリーズ5】，第3版，2016，p89,p126～159
- ・香芝市公式サイト（2021.5.10）  
<http://www.city.kashiba.lg.jp/cmsfiles/contents/0000000/950/files003768.pdf>
- ・甲南大学教育学習支援センター e-Learning コンテンツ（2021.5.10）  
[http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/01/1\\_1.html](http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/01/1_1.html)
- ・シリウス先生の心理統計学（2021.5.10）  
[http://daas.la.coocan.jp/toukei\\_hosoku/shinri\\_ques\\_cyui.htm](http://daas.la.coocan.jp/toukei_hosoku/shinri_ques_cyui.htm)
- ・仙台市公式ホームページ（2021.5.17）  
[http://www.city.sendai.jp/kekaku/kurashi/anzen/saigaitaisaku/torikumi/documents/02\\_r1anke-to-houkokusyo.pdf](http://www.city.sendai.jp/kekaku/kurashi/anzen/saigaitaisaku/torikumi/documents/02_r1anke-to-houkokusyo.pdf)
- ・マーケティングコミュニケーションシステム WEBCAS（2021.5.28）  
<https://webcas.azia.jp/formulator/knowhow/answer/>
- ・マーケティングリサーチの学び場～Lactivator～（2021.5.28）  
[https://lactivator.net/2017/05/02/question\\_order/](https://lactivator.net/2017/05/02/question_order/)
- ・輿論科学協会創立 65 周年記念講演，ウェブ調査とはなにか？－可能性、限界そして課

題一（その1）（その2），大隅昇（2021.5.9）

[https://www.wordminer.org/wp-content/uploads/2013/04/193\\_0.pdf](https://www.wordminer.org/wp-content/uploads/2013/04/193_0.pdf)

• Intage 知る Gallery（2021.5.10）

<https://www.intage.co.jp/gallery/net-research/>

• J-STAGE（2021.5.10）

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsei/29/3/29\\_143/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsei/29/3/29_143/_pdf/-char/ja)



# エスノグラフィーについて

18FS043:伊藤聖耀 18FS156:軍司桃有  
18FS101:小畑瑛輝 18FS074:大澤涼花 18FS165:小林大起

## アウトライン

- 1.目的
- 2.エスノグラフィーとは
- 3.調査方法
- 4.エスノグラフィーで大切なこと
- 5.事例
- 6.メリットとデメリット
- 7.参考文献

### 1.目的

東日本大震災を通じて、必要となる支援の明確化や子どもの遊び場、震災当時小中学生だった子どもが現在、親になり、当時についてどのように今の子どもたちに伝えていくのかなどの内容を特に震災被害が大きかった南三陸と石巻の方たちに調査をします。その調査方法が①エスノグラフィー②半構造化面接③質問紙調査④倫理的配慮が挙げられた。その中で私たちは①エスノグラフィーの調査方法論に目を向けました。エスノグラフィーとはどのような調査方法であり、どのような調査に役立つのかについて学びを深めていきたいと考えました。

### 2.エスノグラフィーとは

エスノグラフィーとは「民族誌」と訳され、フィールドワークに基づき、その社会の歴史、経済、政治、文化などの現象を質的に記述し、まとめたものである。エスノグラフィーは、文化人類学や社会学、心理学などで用いられる研究手法であり、文化や習慣による行動様式を詳細に記述する方法を指す。これはデータや統計を活用して調査する定量的な研究とは対照的で、自由なインタビューやありのままの状態の観察などを重視する手法となっている。もともとは西洋文化と異なる文化圏の研究に用いられたが、今日では私たちの日常生活も対象となり、その行動の詳細な観察を通して、本質的なニーズなどを推測していく方法である。そして、インタビューやアンケートでは顧客の顕在化したニーズについて直接伺うことができますが、エスノグラフィーでは被験者の日常の行動や何気ない言動を観察する中で、潜在ニーズを探り、意思決定に至るまでの過程を把握することを目的として行われる。このエスノグラフィーは、近年では新たな課題を発見する手段として、マーケティングをはじめ、人材育成やマネジメントなど、ビジネスの分野にも取り入れられるようになった。エスノグラフィーによって顧客の普段の行動や言動を観察することで、新たなニーズや課題を探る手段となる。

### 3.調査方法

エスノグラフィーを実施する流れについて

#### 1. 調査計画

まずは調査の目的に沿って、どのような調査対象者を抽出したいか、どのような生活状況に寄り添うか、そして得た情報をどう活用するかなど、調査の設計を行う。

エスノグラフィーには、何を明らかにすべきか仮説を立てて臨むケースと仮説がない状態から受け入れるケースの両方がある。

#### 2. 調査対象者の募集と選定

調査の対象者を選定する。

通常のマーケティング調査では、一般的な方を対象として行われますが、エスノグラフィーではヘビーユーザーやアンチユーザーなど、極端な思考を持つユーザーに対して行われる場合もあり、そのようなユーザーの深層心理からヒントを得て、多数派の一般の方々をより強く動かすものは何なのかを探れる期待が持てるためだからだ。

#### 3. 調査の実施

調査対象者のご自宅など、私生活の環境に調査員が赴き、行動の観察を行います。写真や動画の撮影をしたり、適宜インタビューをおこなう。

エスノグラフィーによって明らかにできる項目としては、以下のことが挙げられる。

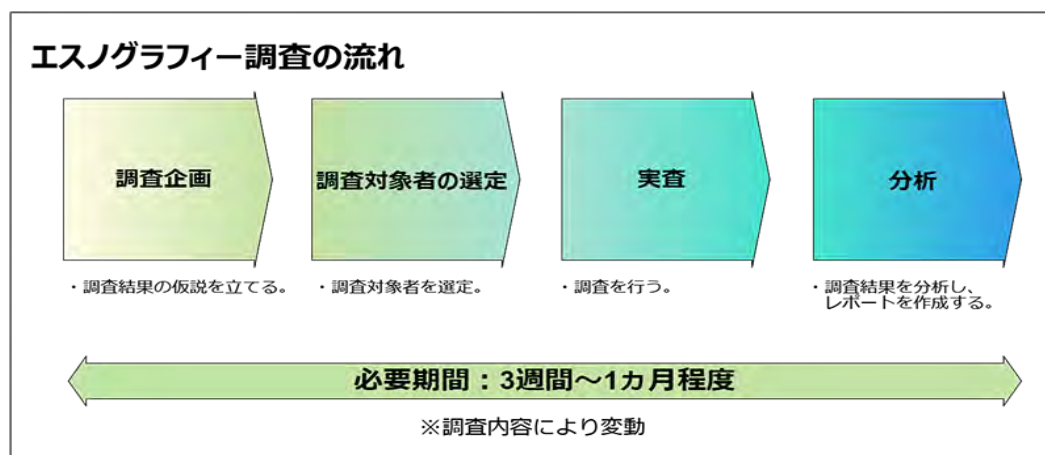
- ・消費者の潜在的なニーズにつなげられる根拠
- ・ターゲットとなる消費者の価値観、ライフスタイル
- ・製品・サービスが利用され環境とそこにある課題や困難
- ・製品やサービスが利用されている最中やその前後に行われる消費者の行動 など

#### 4. 調査結果の認識合わせ

観察した際の映像記録を見せながら、現場で見聞きした情報を調査員から関係者へ共有します。仮説と照らし合わせながらディスカッションを重ね、結論へと導く。

#### 5. 調査結果の集計・レポートニング

分析した定性的な調査結果を、報告書として取りまとめます。エスノグラフィーの結果は新製品のアイデアになったり、コンセプトの策定に活用できたり、ターゲットとなるペルソナ像を明らかにしたりと、さまざまなマーケティング活動へと役立てられます。



#### 4. エスノグラフィー調査で大切なこと

- ・対象者の行動に対して正解、不正解を判断するのではなく、対象者の生活の深く入り込み、共感すること
- ・正解ではなくチームで共通認識として設定した一般論を念頭において、そこの差分や対象者独自の特異点を探ること
- ・調査結果の質を上げるために丁寧な対応を心がけ、対象者との信頼関係の構築を図ること

#### 5. 事例

##### エスノグラフィーを用いた事例①

##### 抗菌力に着目したLIONの衣料用洗剤「トップHYGIA」

生活用品メーカーLIONでは、新しい洗剤を開発するために、一般家庭の主婦の自宅でエスノグラフィーを実施しました。すると、家の中で使うパジャマやタオルと、外で着た服とを、分けて洗濯する行動が観察できました。一方でその主婦はトイレ掃除には手袋を使わず、素手で行っていました。

つまり、家の中のことは目に見えるから安心、家の外には何があるかわからないから不安、という、家の外に対する衛生上の不安がある様子が窺えたのです。そこで衛生上の不安を払拭する抗菌力をうたった洗剤が開発されヒットに至りました。

このような場合、洗剤だからといって洗濯する工程だけに着目しては、消費者が潜在的に求めていた「衛生面の不安の払拭」という課題を見つけることができません。エスノグラフィーを行ったことで新しいニーズを発見できたのです。



## エスノグラフィーを用いた事例②

日本でも一時期流行した「セサミストリート」は、アメリカの番組制作会社「セサミ・ワークショップ」が制作する子ども向け教育番組。英語の読み書き、数の数え方・計算、保健・衛生などを取り上げ、子どもの生活習慣や就学前の教育に役立つ内容となっています。

同社は、2009年ごろからiPhoneなどのスマートフォン向けアプリ・コンテンツに注力し始めました。数々のアプリの中でも特にヒットしたのがスマートフォンアプリ「Elmo Calls」です。



「Elmo Calls」は、アメリカのデザイン会社IDEOとパートナーを組み、人間中心のアプローチで開発されました。このアプリは、2-5歳の子どもとその両親向けに「楽しく生活習慣が身につけられる手助けをすること」を目的として作られました。例えば、お手洗いや着替え、歯磨き、早寝早起きなど、毎日繰り返す生活習慣を、親に加えてエルモからも教えてもらえるというものです。このアプリが実現する最も重要なユーザー体験は、歯磨きやお風呂、就寝・起床といった「躰をしたい習慣と時間帯」を親がスケジュール設定することができ、その設定時間にエルモが子どもに「電話」をかけ、エルモが「生活習慣を教えてくれる」という点。

このアプリが単なる子ども向けコンテンツとして終わらずに大ヒットした理由には、この「電話」というモチーフにあると言われてしています。そして、このモチーフはエスノグラフィック研究によって導き出されました。

IDEO社がこのアプリを作るために幼児観察をした際、彼らは子どもが「テレビのリモコンを電話のように耳にあて、両親が携帯電話で話す姿の真似をしていた」点に着目した。大人の真似をしたがるというのは、幼児期に見られる特性であるが、アプリの利用を通じて「パパとママと同じように、エルモと携帯電話で話せる」というある種の背伸びした体験ができることは、子どもがアプリを喜んで使う動機付けになるのではないかとIDEO社のメンバーは考えたのです。

リリースされたアプリは1ヶ月の無料期間中に400万回以上利用され、App Storeで子ども向けの必須アプリにランクインされました。

ともすれば硬くなりがちな教育アプリだが、ユーザー観察から見てきた子どもの心理をプロダクトに反映することによって、楽しく最適なコミュニケーション設計を実現することに成功しました。

## 6. メリットとデメリット

### メリット

- ・リアリティある多くの情報に出会える  
→実際に消費者の生活や自宅の環境を目で見て、製品の課題や強みを確認できる点
- ・潜在ニーズや新しい仮説を発見できる  
→固定観念に捉われず、新しい視点で潜在ニーズや仮説を発見できること
- ・消費行動に至る背景を理解できる  
→その製品を消費者がどのように利用しているのか、なぜ利用しているのかを、消費者の行動や置かれている環境から、より具体的に想像して理解することができます。

### デメリット

- ・リクルーティング、調査員・録画機器の調達など、手間とコストがかかる。
- ・しっかりとした仮説とスキルのある調査員がいなければ成り立たない。  
→調査を成り立たせる重要な要因は『仮説』と『調査員の技量』

## 7. 参考文献

- ・エスノグラフィー調査とは？ 調査の流れやメリット・デメリットを解説  
<<https://www.research-media.net/contents/wp/glossary/ethnography/>>
- ・エスノグラフィーとは？ 定義と方法、成功事例をわかりやすくご紹介  
&<<https://neo-m.jp/column/marketing-research/-/2489/>>
- ・あしたの人事 エスノグラフィーとは？ 効果やメリット、ビジネス成功事例を解説  
<<https://www.ashita-team.com/jinji-online/business/8589>>
- ・ヘルス・エスノグラフィー—子どものフォトボイスを事例として  
<https://since2020.jp/knowledgebase/case-study/1520/>
- ・エスノグラフィー調査とは？ メリットとデメリットの解決  
<https://www.research-media.net/contents/wp/glossary/ethnography/#i-4>
- ・エスノグラフィーつ調査で大切なこと  
<https://goodpatch.com/blog/ethnography-mindset>

# 半構造化面接法

18FS064 蛭原愛絵18FS094 小田嶋皐18FS133 菊地生18FS389 三浦花梨

## 定義 ~半構造化面接法~

- ・ 構造化面接法と非構造化面接法の間と呼ばれる方法。
- ・ 一定の質問に従って面接を進めながら、非面接者の状況や反応によって柔軟に質問方法を変えていく面接法。
- ・ 構造と若干の自由度を持つことで、方向性を持ちつつ非面接者の語りに沿って情報を得られる。
- ・ その人ならではの回答が聞けて、質問の重要度によって答えを掘り下げることができる。
- ・ ある程度の仮説が必要。

## 定義 ~構造化面接法~

- ・ 質問内容と評価基準が完全に設定されている方法。
- ・ あらかじめ定まっていた質問方法に沿って手順通りに進めていく面接法。
- ・ 面接官によって質問を変えることなく一律の方法で行う。

## 定義 ~被構造化面接法~

- ・ あらかじめ質問を用意することはない。
- ・ 面接官が自由に質問を投げかけ、非面接者の反応に応じて自由に質問を投げかけていく面接法。
- ・ マニュアルや評価基準は決まっていない。

## 目的

### 1. 人材の見極めに有効

必要不可欠な質問事項がある中で、面接官に自由な裁量を持たせて面接を行うことで必ず得ておかないといけない情報のほかに非面接者のマインドを深く掘り下げることによって、その人自身について良く知ることができる。

### 2. アイスブレイクを交えた面接法

面接を行うにあたり、緊張はつきものである。その中で半構造化面接法は非面接者自身の質問にシフトチェンジをすることができる面接法であり、緊張を和らげるとともに、非面接者の本心に近い答えが聞けるのに有効である。

### 3. ベテランの面接者ではない人が面接を行うとき

構造化面接ではマニュアルが完全に定まっているが、非言語コミュニケーションやその人自身を深堀する際には有効ではない方法といえる。また、非構造化面接ではマニュアルが一切定まっていないため面接官としての技量が面接の質に大きく影響してしまう。その中で半構造化面接法は、面接官の質問の軸に対し面接官自身が深く理解さえすれば柔軟な質問を問いかけることができ、面接官の腕によらず評価をすることが望める。

## 半構造化面接を実施するメリットとは

一定の評価基準に沿った質問項目を用意することで、誰が面接官になっても一定の基準で応募者を評価できるという構造化面接のメリットを保ちつつも、面接者のスキルや経験による判断も織り交ぜることができる。

応募者の能力や人間性などをバランス良く評価しやすくなる。

半構造化面接では、構造化面接よりも柔軟な対話が成立しやすいため、和やかな雰囲気での面接を行うことができ、応募者の能力や人間性をバランスよく判断できるというメリットがある。

## 半構造化面接のデメリットとは

半構造化面接では面接官の自由な裁量で対話を深めていくため、経験の浅い面接官や主観

の強い面接官の場合、一定の評価基準から逸脱した話題に流れてしまったときに軌道修正ができず、大事な面接の場がおしゃべりレベルの浅い会話に止まってしまうというリスクが伴う。

評価基準やマニュアル策定が無駄になってしまうというデメリットがあるといえる。

## インタビューガイド・事例

### ●参考引用

北九州市の地区防災計画に関する地域社会学的研究

—半構造化面接法によるインタビュー調査及び SCAT による質的データ分析—

[file:///C:/Users/tfust/Downloads/1072\\_0008\\_11.pdf](file:///C:/Users/tfust/Downloads/1072_0008_11.pdf)

### ●調査の要旨

本研究の目的は、2013年の災害対策基本法改正で創設された地域コミュニティの住民等を主体とした共

助による防災計画制度である「地区防災計画制度」について、政令指定都市の中でも先進的な取組が実施され

ている北九州市独自のモデル事業に関する調査を踏まえ、**地区防災計画づくり**を通じた住民主体のコミュニ

**ティ防災**の在り方について考察を行うことである。

### ●調査手法

北九州市の防災担当官2人に対して、**半構造化面接法**によるインタビュー調査を実施し、SCAT (steps for coding and theorization) を用いた質的データ分析を行った。

### ●インタビュー調査の手順

質問項目作成 (企画立案・2017年7月18日～)

↓

事前説明 (アポイントメント、インフォームド・コンセントの徹底、ラポールの構築を含む・



2017年7月24日～)

↓

インタビュー調査の実施(2017年8月4日)

↓

調査結果の記録(インフォーマントの了解を得てICレコーダーPanasonic RR-XP007-wで記録、手書きノート作成を含む・2017年8月4日～)

↓

補足調査(メール等での追加情報収集、調査結果の再構成、確認依頼を含む・2017年8月7日～)

↓

最終取りまとめ(2017年10月～)等

#### ●インタビュー調査におけるラポール形成

本インタビュー調査でのラポールについては、前出のシンポジウムで西澤准教授と梅木係長が意見交換をしていたことや、両係長が、筆者や西澤准教授の過去の執筆物を読まれていたこともあり、ラポールの構築が事前にスムーズに進み、詳細なお話を伺うことができた。

#### ●インタビュー調査におけるインフォームド・コンセント

インフォームド・コンセントについては、事前及び事後に、調査手法、調査結果の取り扱い、公表方法等について口頭で説明を行い、先方の了承を得た。

#### ●インタビュー調査の手法及び分析手法

まず、インタビュー調査は、ある程度質問内容は決まっているが、状況に応じて質問を変更したり、追加したりして、目標とするデータを収集する方法である「半構造化面接法(semi-structured interview)」で実施した。

この面接法は、事前に検討作業を通じて質問項目や質問内容をあらかじめ準備する点では、「構造化面接法」と共通しているが、調査対象者(インフォーマント)に対して対話形式で向かい合い、相手の反応やその場の状況に応じて質問の順番や質問内容を変更したり、追加・削除したりすることが想定されており、インフォーマントは、質問に自由に回答することが期待されている。

そして、調査者は、インフォーマントとやり取りをしながら、臨機応変に質問を進めることになる。

#### ●半構造化面接法を採用した理由

半構造化面接法で実施することにしたのは、後述のようにインフォーマントが北九州市の防災担当者であり、当該分野の専門家であることから、質問に対して**自由な回答**を求め、**積極的に調査への参加**を求める方式が馴染むと考えたため。

●インタビュー調査で事前に想定していた質問事項

- ・「まちづくり推進事業」の意義及び特徴と地区防災計画づくりを目標とした理由は何か。
- ・「まちづくり懇話会」から「まちづくり推進事業」発足までの経緯等住民主体の取組履歴とその展開状況はどのようなものか。主導した住民等は誰か。
- ・「まちづくり車座集会」の進め方と「地区 Bousai 会議」の関係はどのようなものか。
- ・「地区 Bousai 会議」の進め方と地区防災計画作成までのプロセスはどのようなものか。ファシリテーターの役割はどのようなものか。
- ・モデル校区の選定方法と進め方はどのようなものか。これまでの事業の成果と課題はどのようなものか。27年度の進め方や継続の目途はどのようにになっているか。
- ・災害対策基本法に基づく地区防災計画策定の目途はどのようにになっているか。モデル校区中一番進んでいる校区はどこか。
- ・モデル校区でうまく計画づくりが進んでいる要因は何か。(例リーダーの存在、地域要因等)。
- ・企業との連携が進んでいたり、企業主体の計画づくりの例はあるか(「まちづくり車座集会」で企業が避難所提供を申し出た例があると聞いたが、どこの企業か)。
- ・やる気のない住民を巻き込んで住民の合意形成を図る際の難しさやコツは何か。
- ・防災活動と他の地域活動、地域活性化との関係はどのようにになっているか。
- ・北九州市立大学との連携の経緯はどのようなものか。

●インタビューの分析

SCAT の手法を採用

【利点】

- ・小規模な調査や単発の調査に向いている
- ・個人的な印象や直感による分析を避けることができる

表 SCAT による市防災担当職員へのインタビューの分析例(様式については大谷(2008)参照)

2017年8月4日(金) 14:00~15:30 北九州市防災担当職員への半構造化面接法によるインタビュー分析(一部抜粋) インタビューー:金 インタビュイー:梅木久夫北九州市消防局警防課警防係長 場所:北九州市消防局警防部警防課							
番号	発話者	テキスト	①テキスト中の注目すべき語句	②テキスト中の語句の言い換え	③左を説明するようなテキスト外の概念	④テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)	⑤疑問・課題
1	聞き手	モデル校区のうち、志井校区でうまく計画づくりが進んでいる要因は何ですか。					
2	梅木氏	自治連合会会長等をやられている大迫隆典会長の影響が大きいと思いますね。熱心に皆のための活動されていて、河川清掃とかの活動が防災活動にまで拡大していきまして、地域防災力が向上しました。	連合自治会会長、熱心、河川清掃、地域防災力向上	住民のリーダー、献身的、日頃の地域活動、安全性向上	地域コミュニティのリーダー、勤め、日常性、結果防災	自治連合会会長等の献身的な住民のリーダーの存在、地域活動の拡大による地域防災力向上。	熱心に自治連合会会長等を続けられる秘訣は何か。
3	聞き手	ほかにもうまく進むための特徴がありますか。					
4	梅木氏	マンションも一軒家もあるので、新しく移ってきた住民も積極的に受け入れて町内自治会の加入者を増やしていますね。市民センターで活動して、校区全体で良い関係を構築しています。	新しく移ってきた住民、積極的に受け入れ、町内会自治会、市民センター、良い関係	新規居住者、歓迎、地域コミュニティ、コミュニティセンター、良好な人間関係	外部からの人口流入、町内会、活動拠点、防災力向上	新規居住者の積極的な受け入れ、校区全体での良好な人間関係	マンション住民の町内自治会加入率がどのように変化しているか。
ストーリーライン(現時点で言えること)		うまく防災計画づくりを進めている志井校区では、連合自治会会長等の献身的な住民のリーダーの存在とコミュニティセンター等を中心とした新規居住者を積極的に受け入れる校区全体での良好な人間関係という特徴がある。					
理論記述		地域コミュニティにおける献身的な住民のリーダーの存在と新規居住者を積極的に受け入れる校区全体の良好な人間関係が防災計画づくりの成功の要因。					
さらに追究すべき点・課題		住民のリーダーが、熱心に自治連合会会長等を続けられる秘訣やマンション住民の町内自治会加入率の変化。					

## ●調査結果(一部抜粋)

Q「モデル校区でうまく計画づくりが進んでいる要因は何か。(例リーダーの存在、地域要因等)」

A 校区の自治連合会の会長等のような**献身的な住民のリーダーの存在**、コミュニティセンター等を中心とした**新規居住者**を積極的に受け入れた校区単位の**良好な人間関係**、河川の清掃活動のような日常的な地域活動が防災活動にまで拡大し、結果的に**地域防災力の向上**につながっている、いわゆる「結果防災」といえるような特徴もみられる。

このような優れた取組の中で、特に注目すべきなのは、これらの活動を支援している担当行政官が、担当業務を離れてからも、担当していた地域コミュニティに寄り添って、地域住民としての立場やNPOとしての立場で、**地域コミュニティの活動を側面的に支援**していることである。このような立場をかえた個人的な支援が、行政と地域コミュニティの連携を可能にするとともに、行政に蓄積されたノウハウを地域コミュニティに伝えることにもつながっているのである。

地区防災計画づくりに限らず、地域コミュニティの防災力の向上には、ソーシャル・キャピタル理論等によって、地域コミュニティ内の住民の**人間関係の良好性**が鍵になるといわれているが、ノウハウを持った担当行政官が異動してからも立場をかえて地域コミュニティの住民として個人的にその防災活動を支援していくことが、大変大きな役割を果たしてい

る。

Q「モデル校区の選定方法と進め方はどのようなものか。これまでの事業の成果と課題はどのようなものか」

A→「地区防災計画制度」の推進に当たっては、単なる計画の数とかカバーエリアだけでなく、その質や活動の継続の可能性等を十分に考慮する必要があるが、本稿で取り上げた北九州市の地区防災計画づくりの事例は、今後の地域防災力の強化を考える上で、大きなヒントになるのではないかと考える。特に、市の防災担当出身者の地域コミュニティでの活用の在り方等については、行政と地域コミュニティの連携の鍵となる重要な要素であり、今後さらに継続して観察し、考察を行う必要があると考えている。

## コロナ禍で面接をする時の注意事項

### 1. 公共交通機関の利用自粛

可能な限り自家用車や自転車、または徒歩での移動。

やむを得ず、公共交通機関を利用する場合は、感染予防に十分に留意する。

### 2. 検温と体調の確認

下記のような症状がある場合は面接日の再調整の電話またはメールで連絡をする。

- ・当日の朝に検温し、37.5℃以上の発熱がある場合
- ・風邪の症状がある場合
- ・強いだるさ（倦怠感）や息苦しさ（呼吸困難）の症状がある場合
- ・その他、新型コロナウイルスへの感染が疑われる症状がある場合
- ・直近14日以内に感染者、または感染が疑われる方と濃厚接触した場合
- ・直近14日以内に海外へ滞在した方、または滞在した方と濃厚接触した場合
- ・直近14日以内に「特別警戒都道府県」など、感染拡大が懸念される地域を訪れた場合

### 3. 感染予防グッズを準備

マスク、アルコール消毒などを準備する。

### 4. “密”になりやすい場所を避ける

会議室や待合室、またエレベーターなどでは飛沫感染や接触感染を防止するために、十分な間隔をとるようにする。ソーシャルディスタンスは、約2mとされている。互いに手を

伸ばして届く距離が目安。

#### 5. こまめな手洗い

手洗い場所を確認したり、移動中でもこまめな手洗いを意識する。

### オンラインで面接をする時の注意事項・配慮

#### 1. 開始までのマナー

- ・インターネット接続が安定した場所で行う
- ・背景の映り込みに注意する
- ・アカウント（zoom、スカイプ）を用意する
- ・充電を確認する
- ・マイク音量・イヤホンの確認

面接当日にトラブルにならないように事前の準備を行うと安心。インターネット環境が安定しているか、背景の映り込みがないか、アカウント名や写真が適切か、充電できているか、マイクや音量に問題がないかなど確認しておく。

#### 2. 入室時のマナー

- ・スタート時刻の3分ほど前にオンライン会議室に入室
- ・入室できなかった場合の緊急連絡先も念のため確認しておく

#### 3. 開始してからのマナー

- ・話し方

普段よりも大きめの声で抑揚をつけて話す。間合いの取り方としては、「相手の会話が終わったら2拍待ってから話す」くらいのスピードを意識する。

- ・表情

相槌や頷きなどのリアクションを大きめにする。自分の態度や感情が相手に伝わりやすくなり、表情が見えにくい分をカバーできる。

- ・目線

「自分が話す時はカメラを見る」「相手が話す時は画面を見る」を意識する。

- ・視線

背筋を伸ばして椅子に座り、上半身全体が画面に映るような姿勢で臨む。

#### 4. 退室時のマナー

- ・オンラインの接続はこちらが先に切るのではなく、企業側に切ってもらうのが基本ルール

ル

※ただし、しばらく経っても相手が退室しない場合や、面接官が画面の前から消えたのに接続がそのままになっている場合は、「それでは失礼いたします」と念のためひと声かけた上で、こちらから通信接続を切っても問題ない。

#### 5. 服装・髪型のマナー

- ・男性の場合はビジネススーツ、女性の場合はスーツやジャケット着用が基本(就職面接意外や私服での面接ではフォーマルな格好がマスト)
- ・服装の乱れがないか事前に鏡を見てチェック
- ・顔まわりが隠れないようにすっきりした髪型
- ・カメラに映る顔が暗い場合は照明等で調整する。
- ・清楚感を意識する。

Web面接では対面とは異なる準備や配慮が必要となる。また、対面とオンラインでは、相手に与える自分の印象が変わってしまうこともある。こうした従来の面接との違いを理解し、オンラインで相手から自分がどう見えるかを事前に確認しておけば、初めてWeb面接を受ける人の不安も解消される。自信を持って本番に臨むためにも、Web面接ならではのマナーと注意点をしっかり把握しておく。

#### 参考・引用文献

定義と目的

[https://mitsucari.com/blog/semi\\_structure\\_interview/](https://mitsucari.com/blog/semi_structure_interview/)

<https://digireka-hr.jp/structured-interview/>

メリット、デメリット

[https://mitsucari.com/blog/semi\\_structure\\_interview/](https://mitsucari.com/blog/semi_structure_interview/)

インタビューガイド・事例

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsnr/43/4/43\\_20200226084/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsnr/43/4/43_20200226084/_pdf/-char/ja)

[file:///C:/Users/TFUST/Downloads/1072\\_0008\\_11.pdf](file:///C:/Users/TFUST/Downloads/1072_0008_11.pdf)

コロナ禍で面接をする時の注意事項

<https://mutsubi-a.jp/news/20200604/>

オンラインで面接をする時の注意事項・配慮

[https://type.career-agent.jp/knowhow/web\\_interview\\_manners.html](https://type.career-agent.jp/knowhow/web_interview_manners.html)

## 倫理的配慮について

稲村 南風 18FS051 佐々木 汰知 18FS192  
佐藤 夏鈴 18FS207 湯川 柊 18FS429

1. はじめに
2. 倫理的配慮とは
3. 倫理的配慮の必要性
4. 事例
5. 具体的な調査方法
6. まとめ

### はじめに

大規模地震に加え、津波の発生により、膨大な被害をもたらした東日本大震災から10年が経つ。被害にあった場所や者たちは新しく修復、復旧されている。しかし、復興の道のりは長く、被災者の困難が残っていたり、PDSに悩まされる方もいる。そこへの調査を行う上で、「倫理的配慮」について知ることは大切なことであると考えられる。

「倫理」とは

倫理とは、「礼記」(らいき)という中国の古典に出てくる言葉で、“人倫のみち。実際道德の規範となる原理。道德。

・倫＝仲間・人間・世間                      ・理＝物事の道理・筋道

つまり、倫理とは、人の世の筋道、道理、もっと平たく言えば、“人間にとってふさわしいあり方や振る舞い方”である。

ちなみに日本では、明治時代に西洋から入ってきた“ethics” (エシクス) という言葉の訳語として当てられたのが、倫理という言葉の最初だといわれています。

### 「倫理的配慮」とは

倫理的配慮とは、何(誰)を研究対象とするか、データをどのように管理・使用するか、研究をどのように公開・発信するかなど、研究のあらゆる要素を決定する上で欠かせないものである。とくに、人を対象とする研究では、健康・安全・アイデンティティなどに関する諸項目(つまり個人情報)について、特段の配慮が必要になる。人が対象ではない研究でも、対象に応じた配慮が必要になる。研究者は、配慮すべき点を認識しておかなければならず、倫理的な欠陥が生じないように、プロセ



スごとに適切な手段を選択する必要がある。また、倫理的欠陥が生じた場合に、迅速かつ十分な対応ができるよう準備しておかなければならない。

研究においては、専門職の倫理にのっとることが必要であり、所属する職種団体（公益社団法人日本社会福祉士会、公益社団法人日本精神保健福祉士会、公益社団法人日本医療社会福祉協会、特定非営利活動法人日本ソーシャルワーカー協会など）の倫理綱領を遵守しなければならない。学会（一般社団法人日本社会福祉学会など）や研究教育機関等では、所属メンバーが遵守すべき研究倫理指針を定めているところもある。また、厚生労働省は医学研究における指針（「臨床研究に関する倫理指針」）を示しているが、ここに示された研究者等の責務については、福祉分野においても適用されるべきものもある。このような倫理指針に沿って倫理的な配慮を行うことが必須になる。

#### 【参考】

以下は公益社団法人日本社会福祉士会研究倫理規程にもとづき、研究活動を行う際に留意しなければならない事項について定めたものである。

第1章 倫理的配慮
第1条 研究成果を著書、論文及び学会等で発表する場合は、研究目的を外れて社会的に不適切と考えられる用語や差別的表現とされる用語を使用してはならない。引用文中の語についてはこの限りではないが、その旨を明示しなければならない。
第2条 研究を実施するにあたっては、倫理的問題が生じる可能性について事前に検討しなければならない。
第3条 人を対象とする研究を実施するにあたっては、所属する研究機関による研究倫理審査を受けることができる場合は、原則として審査を受けなければならない。

### 倫理的配慮の必要性

- ・ 倫理的配慮によって研究対象者の生命、健康、プライバシー、尊厳および権利を守るのは、人間を対象とした研究を行う研究者の責務である
- ・ 研究対象者がケアの受け手（患者等）の場合、さまざまな健康障害を持ち、ケアを受ける側にいることで、すでに弱い立場にあることを念頭におき、倫理的配慮を行う必要がある

#### ・ 円滑に調査を進めるため

調査において協力が得られるかどうかは対象者個人による調査者の印象に大きく依存する。調査に応じるか否かは対象者にとって数少ない意思決定の機会であることから倫理的な問題は強くここに凝集する。また、社会調査では対象者個人から得られる情報がすべてであるため、そこで十分な情報が得られなければ調査の意味がなくなってしまう

#### ・ 自身の社会的信頼を損なわないため

個々人の発信力が高まっている現代において配慮のない言動は調査者と対象者の1対1の問題だ

けではない。調査者自身の信頼性だけでなく、思い出したくない記憶を思い出させ、対象者を大きく傷つけた上で、配慮をしない悪として社会的に強く非難される可能性もある。

#### ・調査対象者の保護

今回私達が調査を行う石巻、南三陸では、津波による被害で家族との死別や家の倒壊などの強い被災経験をした方はとても多い。それらの方々に配慮に欠けた調査を行うことでフラッシュバックやPTSDなどを引き起こさせること。また、必要以上に傷つけることは絶対に避けなければならない。

⇒調査対象者に迷惑をかけない、不快な思いをさせないという自身のためにも必要である。

### 事例

東日本大震災において両親との死別を経験した子どもたちのために、あしなが育英会では、国内遺児の心のケア事業として、「レインボーハウス」を設立している。レインボーハウスでは、子ども達ひとり一人のグリーフ（死別・喪失を経験した際に表出される感情・反応）を支えるため、子ども達の身体の安全や、心の安心を感じてもらえる環境づくりを行っている。

ここでは、グリーフケアを行うためのファシリテーター（ボランティア）が存在している。このファシリテーターは、悲しみや痛みなどの喜怒哀楽の感情はその本人に代わってあげることが出来ないということを理解しておく必要や、自分を自覚し、自分の感情や言動が誰のためのものか、自分のいまの精神状態はどのようなものかを気付く力を持つことが重要である。グリーフケアを実施する子どもに対して、フラッシュバックを防ぐために話を無理に強要することや、プライバシー保護のために子どもの話を口外しないなど、常に配慮して関わっている。

日常生活の中で誰しものが体験しうる「傷つき体験」に焦点を当て、その「傷つき体験」に対する記憶表象の在り方が、その後の認知や行動にどのように心理的影響を与えていくかについて検討を行う調査（質問紙調査）を実施する際、調査協力者である大学生 296 名に対して以下のような倫理的配慮を行った。

- (1) 研究の目的と意義を丁寧に説明。
- (2) 回答するか否かは個人の自由な意志に基づいて選択できること、および途中で回答を中断したり回答したくない間については飛ばして回答したりすることが可能であることを伝える。
- (3) 回答することでネガティブな影響が発生した場合には、心理的ケアを得られるよう、調査者の連絡先を伝えたり、専門機関の紹介を行ったりする。

他にも、被災直後から現在に至るまでにどのような心理的変化があったかについての阪神淡路大震災被災者に対するインタビュー調査においては、調査開始前に調査協力者に対して、文書と口頭とで調査の趣旨が伝えられ、協力者の自由意思に基づく調査であるこ

と、調査に参加しない場合でもなんら不利益が生じないことを十分に説明し、同意書への署名と捺印を得るという倫理的配慮が行われた。

これらのことから、社会調査を行う中で調査対象者に対して、プライバシーの保護やインフォームド・コンセントの実施はもちろんのこと、デリケートな調査内容に関しては、フラッシュバックやPTSDを引き起こさぬよう、倫理的配慮を意識する必要があることを理解できる。そのため調査を行う際には、調査の目的や手法、その必要性、起こりうる社会的影響について自覚し、調査対象者の協力があつてはじめて社会調査が成立することを理解したうえで、調査対象者の立場を尊重する姿勢で調査に取り組むべきである。

## ○調査研究における基本的倫理

調査研究を行うにあたって、以下の倫理事項に留意しなければならない。

### ① インフォームド・コンセントの尊重

- ・調査目的、調査主体、責任者、連絡先、調査結果の利用・発表の仕方等を明確に伝えたいうで了承を得る

<聞き取り調査に当たってのプライバシー侵害への注意と同意>

☆理解力・判断力が十分でないために主体的な決断が難しい場合へのフィールドワーク

- ・小児、胎児、未成年者
- ・精神障害、知的障害、見当識障害、認知症、セデーション（鎮静）を受けている者
- ・死に直面している者、緊急な治療を要する者

⇒小児、未成年者、認知機能が低下している者は、原則として保護者や代諾者に同意を得るが、その場合でも対象者の発達段階や認知機能に見合った説明を行い対象者の権利を擁護する必要がある。

⇒特に小児は発達段階、特に言語・認知発達段階がさまざまであるが、理解しやすい言葉や方法を工夫し、場合によっては段階的に説明をするなどして協力内容の理解を得ることが必要である。また、用いる言葉の妥当性などは、保護者と相談するなどして慎重に選ぶ。

⇒成熟した未成年者

高校生以上も成人と同じ扱いではなくできるかぎり保護者の同意を得ることが望ましい。

### ② 協力者らに危害を与えることの回避

- ・調査への協力を拒否しても、不利益を生むことはないことの保障
- ・質問や言葉が当事者の心理に悪影響を与えることがあることを考慮し、事前に質問の内容や聞き方等について十分に検討すること

### ③ 協力者らのプライバシー、個人情報の保護

- ・写真や録音を取る場合は、必ず関係者や施設職員の許可を得ること
- ・秘密厳守
- ・個人が特定されるような情報や実名を記載しない

近年は、研究者が本格的な調査研究を行う際には、上記のような研究倫理事項について事前に研究倫理の審査を受けることが求められるようになってきている。また研究倫理上の問題が生じた場合、論文の公開の禁止や取り消しが行われることもあります。我々が学習の

過程で行う様々な調査研究活動においても、こうした諸原則をきちんと意識し、できる限りの注意を払い、必要に応じて事前に教員や関係者に相談をしたうえで、許可を得るようにはなくてはならない。

## 具体的な「倫理的配慮」の活用

### 1) フィールドワーク前

#### ①情報リーフレット/研究計画書の作成

・ 研究対象者に対する具体的な倫理的配慮と同意を得る方法を記載する。(以下のア～カを参考)

- |     |                               |
|-----|-------------------------------|
| (ア) | 調査の目的                         |
| (イ) | 調査主体・責任者・連絡先                  |
| (ウ) | 調査結果の利用・発表の仕方                 |
| (エ) | 秘密保持、および目的外に使用しないこと           |
| (オ) | 調査への協力を否定しても、不利益を被ることはないことの保証 |
| (カ) | 調査項目について明記した文書の添付             |

#### ②倫理審査委員会の審査・承認

・ 研究対象者の権利尊重と安全確保を目的として、第三者による審査が行われる  
・ 倫理審査委員会が設置されていない場合は、倫理審査委員会に相当する決定機関による承認を得る

#### ③インフォームド・コンセント（説明と同意）

・ 研究対象者へ研究の内容等を具体的に説明し、協力の同意および公表の許可を得る  
・ 研究協力に関する利益、不利益、参加拒否および中断の権利等について説明する  
⇒研究者はどのような圧力も与えないように配慮しながら、研究について口頭で説明する時間をとる。  
⇒研究チームは合意された短い情報リーフレット/研究計画書を用い、詳しく説明し、人々が理解したことを確認する。

### 2) フィールドワーク中（調査・見学）

#### ①利用者の邪魔になったり、危害がないように注意

⇒写真や録音を取る際には許可を得る

#### ②聞き取り調査に当たってのプライバシー侵害への注意

#### ③個人情報保護をした調査方式

⇒アンケート調査やインタビュー調査では無記名による調査に

⇒質問紙調査票の個別投函

### 3) フィールドワーク後（論文作成のポイント）

①研究フィールドや研究対象者を特定されないように配慮する

⇒匿名化「A病院」など

⇒どうしても必要な場合は、掲載の承諾をとる

②個人情報の保護

⇒不必要な個人情報を公表しない

⇒調査で得た個人情報を漏らさない

③研究対象者への説明と同意を得たことを記載

④倫理委員会での承諾を受けたことを記載

⑤研究参加による不利益がないように配慮したことを記載

⑥著作権がないように配慮

⇒出典（文献）の明記

⑦データの正確性

⇒不利なデータの無視

⇒データの改ざん、捏造の禁止

#### 【参考】

豊田看護大学紀要10 巻1 号 2015

研究報告

フィールドワークを取り入れた地域診断演習における学生の学び

#### 5. 倫理的配慮

研究に参加する学生の同意は、研究目的と方法について口頭および書面を用いて説明し、同意書の提出をもって確認した。研究への協力は個人の自由意思であること、個人が特定できないように振り返り用紙は無記名とし、記述した振り返り用紙は鍵のかかるBOX へ投函するように伝えた。また対象は学生のため、研究の不参加によって成績に影響することは一切ないことを確約した。さらに、振り返り用紙に記載するための時間と手間を必要とするため、参加者の自由な時間で記述できるように提出期限に配慮した。本研究は、日本赤十字豊田看護大学の研究倫理委員会の承認を得て行った（承認番号2520）。

<https://core.ac.uk/display/267956367>

#### 【引用・参考文献】

あしなが育英会「国内遺児の心のケア事業」

(<https://www.ashinaga.org/activity/emotional-care/>) 2021. 5. 10.

小田部貴子 「傷つき体験」による心理的影響プロセスの解明—「状況依存的記憶」と「言語的記憶」を媒介したプロセスモデルの検討 (2011)

([https://www.jstage.jst.go.jp/article/personality/20/2/20\\_127/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/personality/20/2/20_127/_pdf))

2021. 5. 25

被災体験から立ち直りにおける被災者の心理的变化—阪神淡路大震災被災者の質的研究の観点から— 新谷健介 嘉瀬貴祥 遠藤伸太郎 大石和男

([file:///C:/Users/TFUST/Downloads/AA12387854\\_07\\_13%20\(2\).pdf](file:///C:/Users/TFUST/Downloads/AA12387854_07_13%20(2).pdf)) p144

2021. 5. 21

日本社会事業大学 社会事業研究所・研究倫理委員会

調査研究に取り組むにあたって—調査研究の倫理に関する手引き—

([https://www.jcsw.ac.jp/research/files/insei\\_tebiki.pdf](https://www.jcsw.ac.jp/research/files/insei_tebiki.pdf)) 2021. 5. 25

2021. 5. 25

東北大学大学院医療系研究科医学部研究倫理支援室 医療・研究倫理について

<https://u-tokyo-ohrs.jp/ethics/>

2021. 5. 21

社会調査における倫理問題とフィールド調査

<https://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/journal/communication/pdf/scom-16-01.pdf>

2021. 5. 25

「調査倫理」問題の現状と課題

<https://core.ac.uk/download/pdf/143633256.pdf>

2021. 5. 25

一般社団法人社会調査協会 倫理規程

<https://jasr.or.jp/jasr/documents/rinrikitei.pdf>

2021. 5. 25

IPS に関する質的研究

<http://intentionalpeersupport.jp/research/about-ethic.html>

2021. 5. 24

研究における倫理的配慮とその記述方法

<https://www.gunma-kango.jp/wp5/wp-content/uploads/2018/03/%E7%A0%94%E7%A9%B6%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5>

[%80%AB%E7%90%86%E7%9A%84%E9%85%8D%E6%85%AE%E3%81%A8%E3%81%9D%E3%81%AE%E8%A8%98%E8%BF%B0%E6%96%B9%E6%B3%95.pdf](#)

2021. 5. 25

論文作成のポイントと倫理的配慮

[https://www.nurse.or.jp/nursing/education/gakkai/toko/pdf/point\\_and\\_ethical2020.pdf](https://www.nurse.or.jp/nursing/education/gakkai/toko/pdf/point_and_ethical2020.pdf)

2021. 5. 25

新・社会福祉士養成講座 8 相談援助の理論と方法

P, 282

2021. 5. 24

子ども・若者ともに行う研究の倫理

2021. 5. 27

大学生による子ども・若者の復興にまちづくり調査研究事業報告書

2022年3月15日発行  
一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター

宮城県仙台市 青葉区五橋2丁目1-15  
あしなが育英会仙台レインボーハウス内